平成二十七年度

宮崎県文化講座研究紀要

第四十二輯

宮崎県立図書館

序文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、昭和四十九年度に「宮崎県地方史講座」として開設し実施してきましたが、平成十九年度には地域の歴史のみならず、自然科学を含めた文化の充実と向上を目指して、「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

例年、宮崎県の歴史・考古・民俗・人物・動植物・地理・地質・災害などに関して研究をされておられる方の中から講師を招聘し講座を開催しておりますが、平成二十七年度は、秋成雅博氏「宮崎県における縄文時代草創期研究の現状」、赤崎広志氏「みやざき地質ガイド―郷土宮崎を知るツールとしての地質学―」、武田信也氏「絵はがきの語る歴史」の計3回を実施いたしました。

本研究紀要の内容は、前述の講座の内容を講師の方々に文章にまとめていただいたものです。この紀要は、「宮崎県地方史研究紀要」として創刊号がスタートし、第三十四輯から「宮崎県文化講座研究紀要」とタイトルを変更をしていますが、前回の第四十一輯までの各号は県内外の様々な研究者の方々に利用され、本県の学術研究の発展に大いに寄与してきました。

今後も、当館の研究紀要が県民の皆さまにとりまして、生涯学習の糧となり、また「ふるさと宮崎」の歴史や文化に誇りをもつための礎となりますことを願ってやみません。

最後となりましたが、今回刊行される「宮崎県文化講座研究紀要」第四十二輯に御寄稿いただきました三名の先生方、講座開催にあたり御協力をいただきました関係諸機関に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成二十八年三月

宮崎県立図書館長　**福田　裕幸**

目次

一　秋成雅博　「宮崎県における縄文時代草創期研究の現状」……1～18

二　武田信也　「絵はがきの語る歴史」……21～36

三　赤崎広志　「みやざき地質ガイド　―郷土宮崎を知るツールとしての地質学―」

※横書きのため、裏表紙側より開始

宮崎県における縄文時代草創期研究の現状

宮崎市教育委員会　文化財課
秋成　雅博

目次

一　はじめに
二　宮崎県内の縄文草創期の調査・研究略史
三　現在までに検出されている遺構について
四　草創期土器の研究
五　草創期石器の研究
六　近年出土した注目すべき遺物
七　その他の調査・研究成果
八　おわりに

一　はじめに

宮崎県で初めて縄文時代草創期の遺跡の調査が行われて六〇年が経とうとしている。草創期の資料は特に平成に入ってからの大規模開発に伴う発掘調査等などによって増加を続けている。

南九州の初期縄文文化はその資料の多さから先進性と優位性が話題となる一方で、土器の系統の問題や比較材料の乏しさから列島他地域との時間的対比が困難であることが大きな課題となっていた。しかし、近年の調査においてはその課題を解消できるような成果が得られつつある。今回県内の資料集成を行い、宮崎県における草創期研究の現状を概観したい。

なお、草創期の時期範囲については異論が多いことを承知で土器の出現から岩本式までの時期を取り扱うこととする（註）。

二　宮崎県内の縄文草創期の調査・研究略史

多くの研究資料として注目されている宮崎市の堂地西遺跡・椎屋形第一遺跡などの発掘調査を境にしてその前後に一期ずつ設け、これまでの調査研究について三期に分けて紹介する。このうち一期・二期については岩永哲夫がまとめており（岩永一九九三・一九九七）、本稿ではそれを参考にさせていただいている。

①　第一期（～昭和四〇年代）

本県での草創期の発掘調査は昭和三二年（一九五七）に行われた串間市大平遺跡に始まる。河口貞徳が行ったこの調査ではシラス直上のⅤ層から隆帯文土器が出土している。

昭和四二年（一九六七）には南九州短期大学の鈴木重治が延岡市北方町岩土原遺跡の発掘調査を行い、その第二文化層から隆帯文土器と半船底形細石刃核、剥片素材の細石刃核、細石刃が出土している。鈴木はこの文化層を「後期旧石器時代の終末から新石器時代への変革の時期に相当する」とし、「愛媛県上黒岩洞穴の有舌尖頭器と隆帯文、広島県馬渡岩陰の有舌尖頭器と細線刻文との組み合わせに見られたように、中国、四国まで見られる土器の出現のあり方と違って九州独自のあり方として従来知られた細石器との組み合わせの姿が本遺跡において確認された」と評価している。

②　第二期（～平成九年頃）

昭和五八年（一九八三）に宮崎学園都市建設に伴って堂地西遺跡の発掘調査が行われた。この調査は本県で初めてのまとまった草創期の資料の出土事例といえる。アカホヤ火山灰層下位のⅣ～Ⅴ層上部にかけて口縁部周辺に隆帯をつまんで貼り付けた結果、隆帯上に横「ハ」の字の爪形文を残すものや肥厚させた口縁部周辺に爪形文を施すものなど五〇〇点が出土している。石器としては局部磨製石斧、砂岩製の石鏃、黒曜石製の細石刃、黒曜石製の剥片が同一層から出土した。これらがすべて共伴すべきものなのかどうかはいまだ結論づいていない。又この調査では集石遺構に対して熱ルミネッセンス法による年代測定が行われており、一〇二二〇ＢＰと九四五〇ＢＰの年代が得られている。

平成二年（一九九〇）には串間市三幸ヶ野第二遺跡の発掘調査が行われた。サツマ火山灰層（一一〇〇〇ＢＰ）の下のⅥ～Ⅶ層から土坑一基、集石遺構二基と隆帯文土器等が検出されている。

平成三年には椎屋形第一遺跡の発掘調査が行われた。草創期の調査範囲は四〇〇㎡と小規模ながら、Ⅵ層から集石遺構二基と一〇〇〇点に及ぶ複数の施文方法の隆帯文土器や爪形文土器と共に石鏃や丸ノミ型石斧などの各種石器が出土している。本遺跡の調査によって貝殻押圧文土器が本県にも見られることが明らかになった。

平成五年には串間市西ノ園遺跡の確認調査が行われ、桜島パミスを含んだ層の下層において隆帯文土器の包含層が残っていることが確認された。

これらの調査事例で得られたまとまった資料は南九州の縄文草創期の土器編年の検討に取り上げられる示準資料となっている。

この二期では隣県の鹿児島県においても鹿児島市掃除山遺跡や南さつま市栫ノ原遺跡の発掘調査が行われるなど著しい草創期の資料増加が認められた。このような南九州地域の資料増加の結果を受けて平成五年（一九九三）に宮崎考古学会と南九州の縄文時代草創期を考える会主催で「南九州における縄文時代草創期の諸問題」というテーマで当時の資料集成や事実関係の確認、土器編年や文化様相の検討が行われた。また平成七年（一九九五）には鹿児島県考古学会と宮崎考古学会の合同研究会で「旧石器から縄文へ」というテーマで旧石器～縄文早期に関わる遺構・遺物の検討が行われ、草創期の資料についても概観されて検討すべき課題等がまとめられた。

さらにその二年後には宮崎縄文研究会によって刊行された『宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』で県内の資料集成が行われ、草創期の遺跡は県内全域で二五遺跡に上ることが明らかになった。また同書では県内の草創期の遺物について検討が行われている。

③　第三期（平成九年頃～）

東九州自動車道関連や農業基盤整備事業等の開発事業に伴って大規模な発掘調査が多発し、草創期の資料はさらに激増した。二〇〇八年に筆者が一度集成作業を行っており、その段階で草創期の遺構・遺物が見つかった遺跡数は七七まで増加していた。その後も資料は増え続け、今回八八遺跡にまで達することがわかった。その中で特に重要な調査成果が得られた遺跡について簡単に紹介する。

東諸県郡国富町塚原遺跡では赤色顔料の塗布された草創期の土器が出土し、そのほかにも釣鐘状土製品の報告もある。またここでは隆帯文土器と一部の細石刃核について層位的に分離した状態で出土している。同じ国富町の木脇遺跡ではそれまで確認されていなかった口縁部を肥厚させたような形態の隆帯文土器がまとまって出土している。

西臼杵郡高千穂町阿蘇原上遺跡ではⅧ層からX層にかけて早期の遺物と混在する状況だが、他地域でみられるような爪形文土器と隆帯文土器が共出する遺物包含層が確認されている。またこれらの土器と剥片の木口部分に作業面を設定する細石刃核や尖頭器、石鏃などが出土しており、その共伴関係が注目されている。児湯郡高鍋町赤石天神元遺跡では草創期の遺物包含層が確認され、隆帯文土器に伴う石器資料がまとまって出土している。

児湯郡川南町尾花A遺跡では遺物を伴う竪穴状遺構が発見された。宮崎市清武町清武上猪ノ原遺跡第五地区や都城市山之口町王子山遺跡では多量の隆帯文土器や石器とともに、複数の竪穴住居（竪穴状遺構）、集石遺構や炉穴などの各種遺構が検出され、草創期の集落の様相が把握できるような調査結果が得られている。両遺跡ともに検出された遺構は重複する様子が見られ（第1図）、一定期間存続するような集落が隆帯文土器期には存在することが明らかになった。

前述のとおり、南九州の草創期文化は他地域との時間的な並行関係を取ることが難しいとされてきたが、清武上猪ノ原遺跡では隆線文土器、矢柄研磨器などが出土しており、阿蘇原上遺跡出土の爪形文土器と共に、これらの遺物は他地域との比較材料となりうる。また重複する遺構群も各地で確認されていることから、列島規模での議論ができる条件が整いつつある。

三　現在までに検出されている遺構について

県南地域の都城市や串間市の遺跡については、土層堆積が厚いことやサツマ火山灰が面的に見られることもあり、草創期と早期の遺構・遺物を層位的に分離して検出されることがある。一方、県央以北の地域ではサツマ火山灰が見つかることが少なく土層堆積も薄いことから、アカホヤ火山灰層下位から霧島小林軽石を含むローム層の上位にかけての土層中から早期の遺物と草創期の遺物が混在する状況で出土することが多い。また遺構についても理化学的年代測定法などを使用しないと同じ調査区から検出されたものの帰属時期を明らかにすることは難しい状況である。

そのような状況の中でも近年の調査において草創期の遺構の検出事例は少しずつ増えている。以下に個別の遺構について概観する。

①　竪穴住居・竪穴状遺構

尾花A遺跡で竪穴状遺構一棟、清武上猪ノ原遺跡第五地区で竪穴住居一四棟、王子山遺跡で竪穴状遺構四棟が検出されている。三遺跡とも遺構埋土より多くの隆帯文土器等が出土している。

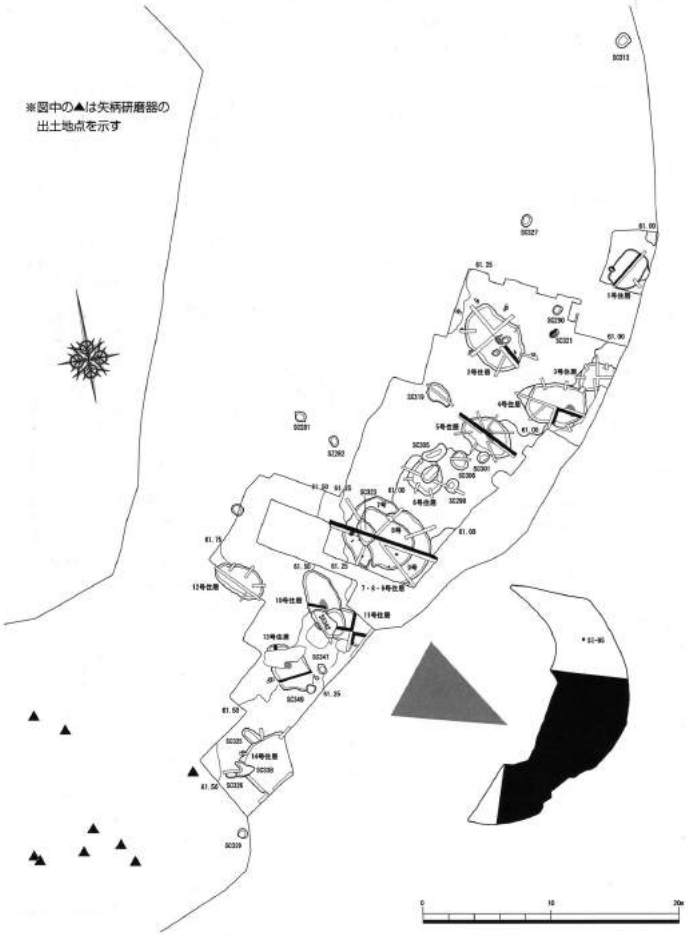
清武上猪ノ原遺跡第五地区の住居の平面プランは不整楕円形・不整円形・不整方形のものが見られ、その規模は長軸が五・二二～二・一六m、短軸が五・二～一・八m、床面積は一八・〇二～三・三五㎡という状況でかなりばらつきがある。なお、住居に伴う柱穴はすべて竪穴の周囲で検出されている。また住居内には炉が検出されたものが五棟あり、そのうちの一つは石組炉であった。

王子山遺跡の竪穴状遺構に伴う柱穴は竪穴の周囲に検出されたものと竪穴内部に検出されたものと二種類確認されている。

草創期後半段階で竪穴住居を複数持つ集落は日本列島全体に見られることや竪穴住居の構造などから水ノ江和同は九州の草創期後半の集落は列島全体と同じ枠組みの中でとらえることができると指摘している（水ノ江二〇〇九）。

なお、及川穣は清武上猪ノ原遺跡第五地区の一四棟の住居跡については遺構の切り合い関係から、多い場合でも三～四棟の居住単位を想定している（及川二〇一四）。

これらのほかに高鍋町牧内第一遺跡ではアカホヤ火山灰層下位の暗褐色ローム層から霧島小林軽石を含む褐色ローム層にかけて環状に巡るピット群が検出されており、テント的な施設が想定されているが、明確な遺物が伴っていないため早期の遺構の可能性も考えられる。同様の事例として延岡市山田遺跡、高鍋町野首第二遺跡、小林市内屋敷遺跡でも検出されており、これらは縄文早期のものとして報告されている。



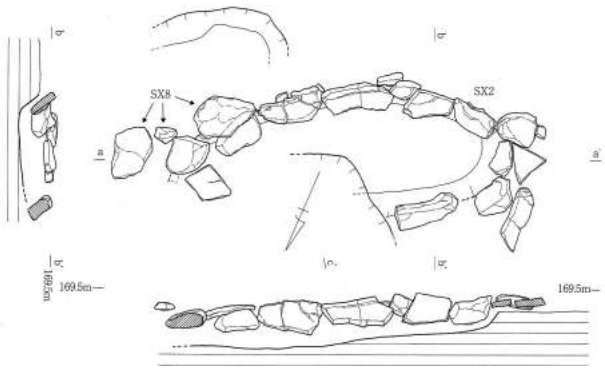
第１図　清武上猪ノ原遺跡第５地区縄文草創期遺構
配置図（S=1/600）

② 集石遺構と配石遺構

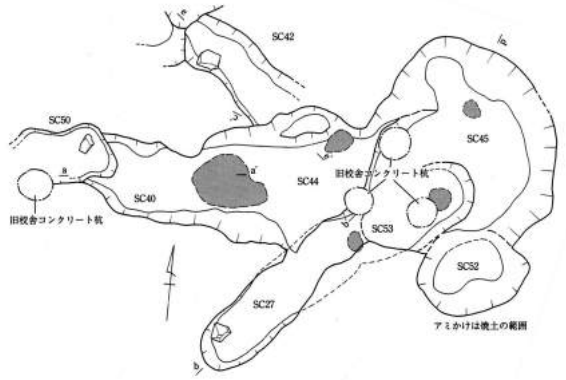
前述のとおり理化学的年代測定法などを使用しないと早期の資料と視覚的に分類することが特に困難な遺構である。早期の遺構との検出面の高低差や、草創期の遺物と平面分布が重なることなどを考慮して草創期の資料とされているものも含め、現在のところ一七遺跡三四基検出されている。

早期の集石遺構と比べると小規模のものが多い。また底石を持つものはなく、掘り込みがないものも目立つ。早期中葉にみられる深い掘り込みを有するような集石遺構は現状では検出されていない。

確実な草創期の配石遺構は三幸ヶ野第二遺跡で一基、王子山遺跡で八基検出されており、炉としての機能が想定されているものとそうでないものが見られる。王子山遺跡では平面形が舟形のいわゆる舟形配石炉（第２図）も確認されている。またここでは炉穴との切り合い関係がみられるものも存在する。



第２図　王子山遺跡配石遺構実測図（S=1/40）



第３図　王子山遺跡炉穴実測図（S=1/80）

③ 炉穴・炉状遺構

遺構埋土に多くの焼土や炭化物を伴っていたり、床面に焼土が検出されたりすることで認定される遺構だが、集石遺構と同様に視覚的に早期の資料と草創期の資料を分類することが難しい状況で見つかることが多い。王子山遺跡では多くの切り合い関係が認められており（第３図）、長楕円形プランのものはその切り合い関係のために溝状となっているものもある。高鍋町北牛牧第五遺跡などで検出されている円形プランのものは地床炉が想定される。現状では炉穴が三遺跡三三基、地床炉が二遺跡二基検出されている。

④ 陥し穴

本遺構は基本的に遺物が伴わないと考えられるうえに、炭化物等も伴うことが少ないため、時期決定が難しい。埋土の状況や埋土中の炭化物の年代測定結果により草創期のものと判断されることが多く、現状では九遺跡一四基検出されている。

⑤ 土坑

清武上猪ノ原遺跡第五地区では一九基の土坑が検出されている。様々な規模・形態のものが見られるが、なかでもＳＣ三二九は深さ約八〇センチの袋状竪穴のような形状で、埋土中から剥片素材の細石刃核と黒曜石や安山岩製の石鏃、隆帯文土器片等が出土しており注目される。王子山遺跡でも土坑一〇基が検出されており、貯蔵穴、廃棄土坑、墓壙などが想定されている。

また牧内第一遺跡では床面に複数のピットを有する土坑が検出されており、遺構埋土の放射性炭素年代測定結果によると一〇一四〇±六〇ＢＰという年代が得られている。このような遺構は清武上猪ノ原遺跡第五地区や川南町前ノ田村上第二遺跡でも多数検出されているが、明確な帰属時期や用途はわかっていない。

⑥ 遺跡（遺構と遺物量）の増減について

馬籠亮道と筆者は近年の南九州の草創期の様相を紹介する中で、

隆帯文土器の時期を中心としてその前後では遺跡数の変動が見られること、検出される遺構にもばらつきがあることを指摘している。

宮崎県内の様子を見ても前隆帯文土器期（細石刃期～隆線文土器の段階）では遺跡数が一四六遺跡、検出された遺構は礫群、陥し穴状遺構、土坑という状況で定住性は低いと考えられる。次の隆帯文土器期には遺跡数は四九遺跡と減少するが、検出された遺構は竪穴住居、集石遺構、炉穴、陥し穴状遺構、土坑と多岐にわたるようになり、遺物量も爆発的に増える状況から定住性が高まった様子がうかがえる。隆帯文土器後の遺跡数は二四遺跡とさらに減少する。宮崎県ではこの時期の竪穴住居は検出されておらず、明確な遺構としては土坑だけで遺物量も少ない。そのため各時期の存続期間などを考慮する必要はあるが，竪穴住居などが構築される隆帯文土器段階や後続する早期前半段階と比べて，遺構形成活動は一旦低下している可能性が高いと指摘している（馬籠・秋成二〇一五）。

このような遺跡数等の変化の要因としては遺跡の年代幅や当時の人々の生活様式に大きく左右された結果が関係している可能性が考えられる。この点については当時の自然環境の変化等も踏まえたうえでのさらなる検討が必要であろう。

四　草創期土器の研究

南九州の土器編年を構築していく中で多くの研究者が宮崎県・鹿児島県の資料について検討を行っている。その大きな流れとしては粘土貼付文や無文土器→隆線文（細い隆帯文）→太い隆帯→隆帯文の口縁部への集中→隆帯文の狭小化・形骸化から早期の貝殻円筒形土器様式への展開が考えられている。そのような研究の中で特に宮崎県の資料については三幸ヶ野第二遺跡、堂地西遺跡、椎屋形第一遺跡の資料がよく取り上げられている。

雨宮瑞生は草創期前葉に鹿児島市の加治屋園遺跡・横井竹ノ山遺跡の資料を当て、中葉に掃除山遺跡、後葉に堂地西遺跡、鹿児島県指宿市岩本遺跡の資料を当てている（雨宮一九九四など）。児玉健一郎は草創期全体を隆帯文以前と隆帯文Ⅰ期～Ⅳ期の五期に分けた。隆帯文Ⅰ期は隆線文土器の段階、Ⅱ期は幅広の隆帯文が出現する隆帯文土器の最盛期とし、Ⅲ期を隆帯の貼付部位が口縁部に集約される段階、Ⅳ期は隆帯の狭小化、単条化、形骸化と器形が円筒形になる段階と設定している。隆帯文Ⅱ期には三幸ヶ野第二遺跡、Ⅲ期には延岡市北方町蔵田遺跡・堂地西遺跡・椎屋形第一遺跡の隆帯文土器を当て、Ⅳ期には堂地西遺跡の隆帯文を巡らす円筒形の土器を当てている（児玉二〇〇八）。

これら論考のように宮崎県域の資料については草創期の中葉以降の資料に位置づけられることが多い中、村上は堂地西遺跡の資料を古い時期の資料と位置づけた。村上は長崎県佐世保市泉福寺洞穴の層位的な出土事例をもとに隆起線文（Ⅰ期）→爪形文（Ⅱ期）→撚糸文（Ⅲ期）と大きく三時期に区分し、椎屋形第一遺跡や堂地西遺跡で出土した隆帯文上に指頭押圧文が見られる資料や粘土紐を指で挟みながら隆帯を施文する土器をⅠ期に位置づけている（村上二〇〇〇）。雨宮や児玉が椎屋形第一遺跡や堂地西遺跡の資料を掃除山遺跡や鹿児島県熊毛郡中種子町三角山Ⅰ遺跡などの資料より新しく位置づけているが、村上はこれらを同時期のものとしている点がこれまで提示されていた編年観とは異なる見解である。しかし、村上はその後、この考えを細分して南九州の土器編年を隆起線に押圧が加わる土器（掃除山・三角山段階）→隆起線上に矢羽根状に連続する摘み痕を残す土器（堂地西段階、第4図3・12）→口縁部に密に爪形文を配する土器（椎屋形段階、第4図7・11）→水迫・岩本段階とする変遷を想定し、日本列島西部の草創期土器編年を検討

している。この中で宮崎県南部の資料を一〇種類に分類しており、木脇遺跡や清武上猪ノ原遺跡第五地区で多く出土している口縁部を肥厚させたように見える隆帯文土器（第４図８・９）をⅨ類として紹介しているが、編年上の位置づけについてはここでは保留としている（村上二〇〇七）。

前述のとおり、他地域と比較検討できるような土器が南九州ではあまり出土事例がなく、南九州域での土器編年が議論の中心であった。しかし、阿蘇原上遺跡の発掘調査において他地域と比較できるような爪形文土器（第４図５）が隆帯文土器とともに出土したことによってその位置づけについての議論が行われている。

鈴木正博は阿蘇原上遺跡の爪形文土器について泉福寺洞穴六層の爪形文土器、佐世保市福井洞穴二層の爪形文土器と比較し、口唇部装飾帯のあり方、爪形文の文様構成、施文密度、文様の区画帯が存在することを指摘し、「阿蘇原上式」を制定して、泉福寺六層や福井二層より古く位置づけた。区画帯の指摘について「下宿式」との共通性を述べている（鈴木二〇〇四）。なお、村上も本州と九州の爪形文土器を検討するにあたって阿蘇原上の資料に対しては鈴木と同様の見解を持っているようである（村上二〇一四）。

このように多くの研究者によって宮崎県域の資料は主に南九州全体の土器編年の中で検討されているが、県内の草創期土器編年については前述の村上の論考で触れられているほかには、日高孝治が提示しているくらいであまり議論は活発ではない。

日高は椎屋形第一遺跡の隆帯文土器ついてⅠ類（粘土紐指押さえによる指頭圧痕、第４図６）、Ⅱ類（無文の三角隆帯）、Ⅲ類（隆帯上に棒状工具痕）、Ⅳ類（粘土紐を指先で挟みながら押さえつけて隆帯を施文したもの）の四種類に分類されていることを紹介し、堂地西遺跡ではこれらのうちのⅠ類が出土していないことを指摘した。さらにサツマ火山灰が確認され、その下層から草創期の遺物が出土した西ノ薗遺跡ではⅠ・Ⅱ類とⅣ類に相当する土器があり、堂地西遺跡のような爪形文が蜜に施文されている資料は見られないことを分析している。この爪形文土器については新東晃一が桜島テフラの下層から確認されておらず、桜島テフラの影響を受けていないと思われる地域に分布し、隆帯文土器よりも新しい資料として位置づけられていることを紹介した。

このような状況から雨宮等の示す隆帯文土器の編年について太目の隆帯を押圧して貼り付ける段階→隆帯を指先で挟んで貼り付ける段階→隆帯を貼り付けるときに付いた爪形文が見られる段階への変遷で概ね理解できるとした。しかし、県北地域の蔵田遺跡や岩土原遺跡、県央地域の児湯郡新富町瀬戸口遺跡の資料の中には隆帯の幅や施文方法が異なるものがあり、県内における地域性も視野に入れる必要性を指摘している（日高一九九九）。

なお、堂地西遺跡の資料については大塚達郎が直接器面に指頭押圧を加え指頭圧痕文で上位紋様帯を表出する土器が粘土紐を螺旋状に巻きつけ、横方向に羽状のつまみ痕を残す手法の土器と併存する典型例として位置付けており、九州固有の爪形文土器の原型としてとりあげている（大塚一九八四）。

日高の論考と前後するが、宮崎縄文研究会による資料集成が行われた際に森田浩次・桒畑光博によって県内の草創期の土器について以下の五つの検討がなされている（森田・桒畑一九九七）。

①岩土原遺跡の細石器と土器（第４図１）の共出について

岩土原遺跡第二文化層で出土している隆帯文土器は、調査者の鈴木も福井洞穴で細石器と共伴した隆線文土器・爪形文土器とも様相が異なると述べていることを紹介したうえで、鹿児島県で細石器と共伴している粘土紐貼付土器や無文土器、鹿児島県出水市上場遺跡の爪形文土器のいずれとも様相が異なり、雨宮の草創期土器編年のなかの掃除山段階（草創期中葉）の資料に近似すると指摘した。

この第二文化層の細石器と土器の組み合わせについては北部九州に近いという地理的位置による南九州との石器組成の差によるものか、それとも第二文化層の細石刃核が二時期にわたるという見解があり、複数の時期の遺物が混在する状況を示している可能性があることを紹介している。

②蔵田遺跡出土土器（第４図２）について

蔵田遺跡出土土器と椎屋形第一遺跡や堂地西遺跡の隆帯の貼り付ける方法は同様であるが、蔵田遺跡の資料は隆帯が一条であるのに対し、県南部の遺跡のものが多条傾向にあるという点について県内での地域差を示す可能性を指摘している。

③霧島遺跡出土土器について

川南町霧島遺跡から出土している爪形施文の土器は草創期末から早期初頭のものと報告されており、押型文土器が普及展開する直前の無文土器に類似していることを指摘した。

④田野町内の隆帯上貝殻施文土器について

県央部以北ではサツマ火山灰が認められず、草創期の土器が早期の遺物と混在して検出されることが多いこと、宮崎市田野町の青木遺跡と元野河内遺跡に隆帯上に二枚貝の背面ないし腹縁を連続押圧して施文した資料があることを紹介した。

同様の手法の土器は鹿児島県西之表市奥ノ仁田遺跡をはじめ種子島の遺跡において確認されており、田野町の資料は隆帯文土器の貝殻施文の広がりを把握するために貴重であると指摘している。

⑤串間市内出土遺跡の草創期土器の出土層準について

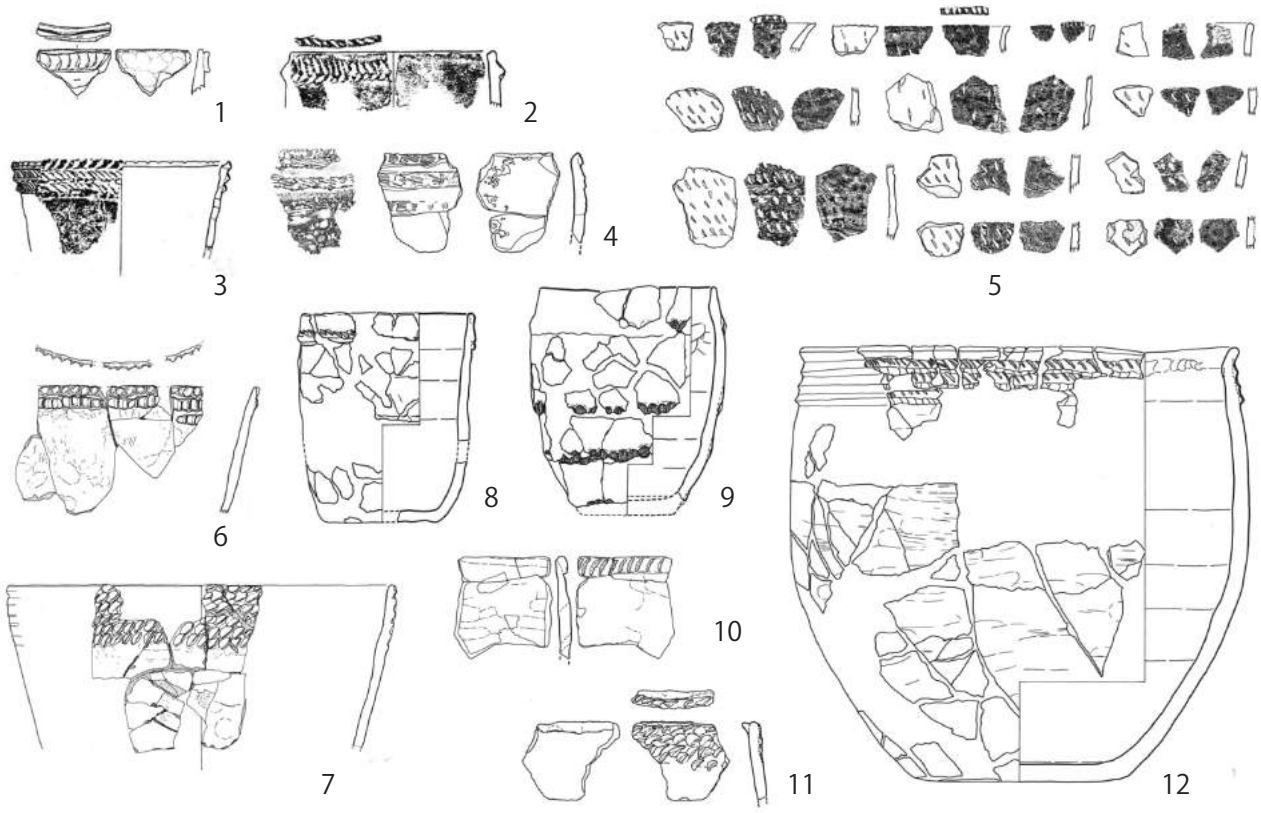
西ノ園遺跡がサツマ火山灰より三〇㎝下層から、三幸ヶ野第二遺跡はサツマ火山灰の直下から遺物が出土していることを紹介し、両遺跡の土器を雨宮編年の草創期中葉から後葉に位置づけた。さらに西ノ園遺跡の資料は太い隆帯文、三幸ヶ野第二遺跡のほうは細い隆帯文で隆帯文の退化形態とも考え、サツマ火山灰を利用した両遺跡の遺物の出土レベルが土器様相や時期差を現していると指摘している。

この五つの検討は当時の資料集成に伴って行われたものであるが、未だ検討されていない問題提起がなされている。それは県内での地域色の検討である。県内の地域性を視野に入れる必要があることは日高も指摘しており、南九州の草創期は隆帯文土器文化とひとくくりにするのではなく地域色を検討しなければ現状で分類されている資料が時間軸の縦並びのものなのか、横並びなのかということの詳細は不明なままとなってしまう。今後取り組まなければならない重要な課題といえる。

この二つの論考のほかには、ここ数年は県内の草創期の土器について目立った議論は行われていなかったのだが、近年の調査成果を受けて二つの論考が書かれている。前者は今まであまり議論が活発でなかった県内の貝殻押圧文土器について、後者は隆帯文土器の施文方法の変遷を王子山遺跡の調査成果の中で追認できたことを紹介しているものである。

筆者は近年の調査成果から宮崎県にも貝殻押圧文土器が少なくとも児湯郡以南には存在することを紹介し、貝殻押圧文が施される土器にはやや胴が貼り内湾する口縁部の器形（第４図９）がみられること、隆帯は単条のものや多条だが薄くその単位が不明瞭なもの、肥厚帯を持つタイプがあること指摘し、児玉編年の隆帯文Ⅲ期に位置づけられるとした。さらに隆帯の特徴からⅢ期の中でも新しい様相を示しており、水迫式の前段階に位置づけられると考えているが、これらの今後の課題としては県南部の王子山遺跡の資料の出土状況との整合性を整理することを挙げている。

またこの論文中で宮崎平野部にも隆線文土器の出土例（第６図）があることを紹介し、それが児玉編年の隆帯文Ⅰ期位置づけられることも指摘している（秋成二〇一四）。



1岩土原　2蔵田　3堂地西　4清武上猪ノ原第2地区　5阿蘇原上　6～7椎屋形第1　8～12 清武上猪ノ原第5地区

第4図　県内出土の隆帯文土器・爪形文土器実測図（S=1/6）

桒畑は王子山遺跡から出土した隆帯文土器を大きく指頭の押圧手法によるもの（Ⅰ類）、親指と人差し指のつまみ手法によるもの（Ⅱ類）に分類した。その他に隆帯状に文様が認められないもの（Ⅲ類）、口縁部に肥厚帯を持つもの（Ⅳ類）、隆帯を持たずに口縁部に爪形文を施すもの（Ⅴ類）、まったく文様の見られないもの（Ⅵ類）に分類した。さらに本遺跡で検出された遺構の土器の出土状況からⅠ類とⅡ類が共出する遺構とそれぞれ単独で出土する遺構があることに注目し、それらの遺構の切り合い関係からⅠ類からⅡ類の時間的変遷を確認し、これまで研究者が提示した隆帯文土器の型式的組列の証左になると述べた。ただしここでのⅠ類の中には貝殻施文の土器は含まないものとしている。

貝殻施文の土器とⅡ・Ⅲ類が近い時期、Ⅵ類がⅠ類かⅡ類のどちらかに伴うものとし、Ⅳ類のうち口縁部に刺突文を施すものは他地域からの移入品で、Ⅴ類の爪形文については一点のみの出土なので客体的な存在である可能性を指摘している。

また都城市高城町軍人原遺跡において細石刃と共伴する無文の土器小片が出土しており、王子山遺跡よりも古く位置づけられる可能性のある資料と紹介している（桒畑二〇一五）。

前述のとおり、県内の資料は南九州全体の草創期の土器編年に組み込まれるという形で検討されてきた。今後の主な課題としては隆線文土器や肥厚帯を持つ隆帯文土器などの新資料を含める県内資料の編年の提示、それには地域性の検討や貝殻施文土器（第4図4・9・10）の位置づけなどを含める隆帯文土器の細分化を検討する必要があるだろう。

この特に遺物量の多い隆帯文土器については隆帯の貼り付け手法や隆帯上の施文方法、文様帯、器形など個別の要素に注目してその系統ごとに変遷を検討したうえで、セット関係や時間的な前後関係を確認するようなより詳細な分析が必要だと考えられる。

また、無文土器の検討も必要である。具体的には鹿児島県姶良市建昌城跡や後述する清武上猪ノ原遺跡第五地区などで出土しているような資料の位置づけである。これらが隆帯文土器と並行する時期のものなのかその後に位置づけられるものなのか新資料を含めて考えるべきであろう。

もちろん従来からの課題である列島他地域との比較、細石器と共伴する土器について検討することも忘れてはならない。

五　草創期石器の研究

本県では岩土原遺跡第二文化層の出土事例から細石刃と土器の共伴の問題などが古くから論じられている。その他に九州旧石器文化研究会等の研究発表によって石鏃や尖頭器、石斧についての検討が行われている。以下に主な論考について紹介する。

①　岩土原遺跡第二文化層の検討について

松本茂が岩土原遺跡第二文化層の出土遺物について塚原遺跡の層位的な出土事例をもとに細分案を検討している。第二文化層には隆帯文土器と泉福寺・羽佐島Ⅲ型・船野型という二つの細石刃核が存在することを確認した上で、塚原遺跡の船野型・畦原型の細石刃核がⅦ層主体、隆帯文土器や石斧関連資料がⅥa～Ⅵb層主体で出土しているという調査成果をもとに第二文化層の出土遺物を【船野型】→【泉福寺・羽佐島Ⅲ型＋隆帯文土器】または【船野型】→【泉福寺・羽佐島Ⅲ型】→【隆帯文土器】と細分できる案を提示している（松本二〇〇三a）。

②　細石器と共伴の問題

宮崎県旧石器文化談話会によって宮崎県内の旧石器時代の編年案が提示された（宮崎県旧石器文化談話会二〇〇五）。その中で細石刃文化期の最終段階に土器を伴う可能性を指摘している。以下に細石刃文化期の編年案である第八段階から第一〇段階の概要を記す。

第八段階（細石刃石器群の出現期）：野岳・休場型細石刃核主体。円錐形の細石刃核や、黒曜石の小礫を使用するもののうち、作業面と打面が急角度で交わるものが該当。

第九段階（細石刃石器群の展開期）：断面U字形の船野型細石刃核や黒曜石製小型の細石刃核の使用。畦原型の出現期。

第一〇段階（細石刃石器群の終末期）：西海技法の影響が見られ、細石刃核の扁平化・底部形態の変容・作業面の狭小化が見られる（剥片の木口部分に作業面を設ける細石刃核が目立つ）。

第一〇段階において土器や石鏃、尖頭器との共伴が問題となり、この段階が草創期に該当する。前半期には隆線文土器やそれ以前の土器の共伴関係が、後半期には隆帯文土器や爪形文土器との共伴関係が想定される。前半期から後半期への移行は船野型細石刃核の消滅。畦原型の小型化と扁平化が指摘されている。

新東によって南九州では隆帯文土器期の細石刃の消失が指摘されていたが（新東一九九八など）、前述した阿蘇原上遺跡の遺物包含層の出土状況や清武上猪ノ原遺跡第五地区のSC三二九の埋土中の遺物の出土状況など、岩土原遺跡の事例も含めて本県では細石刃が隆帯文土器の時期まで使用されていた可能性が見られ、これらは第一〇段階後半の資料と考えられる。

このほかに草創期の石器群の変遷としては芝康次郎が九州の草創期石器群の変遷案を検討する中で南九州の資料にも触れている。芝はa後期旧石器時代末葉の細石刃石器群（野岳型・船野型）→b草創期細石刃石器群（福井型・石鏃）→c草創期石鏃石器群（隆帯文土器段階以降）という変遷をしめしている。その中で宮崎県の資料として、a段階の前半には尾花A遺跡、前ノ田村上第二遺跡、宮崎市佐土原町船野遺跡の資料を、後半に宮崎市佐土原町下屋敷遺跡、

宮崎市清武町白ヶ野第二・三遺跡、高鍋町小並第一遺跡を挙げている。b段階には延岡市北方町黒仁田遺跡、c段階に隆帯文土器が多数出土した塚原遺跡、椎屋形第一遺跡、清武上猪ノ原遺跡群、王子山遺跡などを挙げ、この段階には宮崎平野部に特に遺跡が密集する傾向があると指摘している。

③　長者久保・神子柴文化関連遺物について

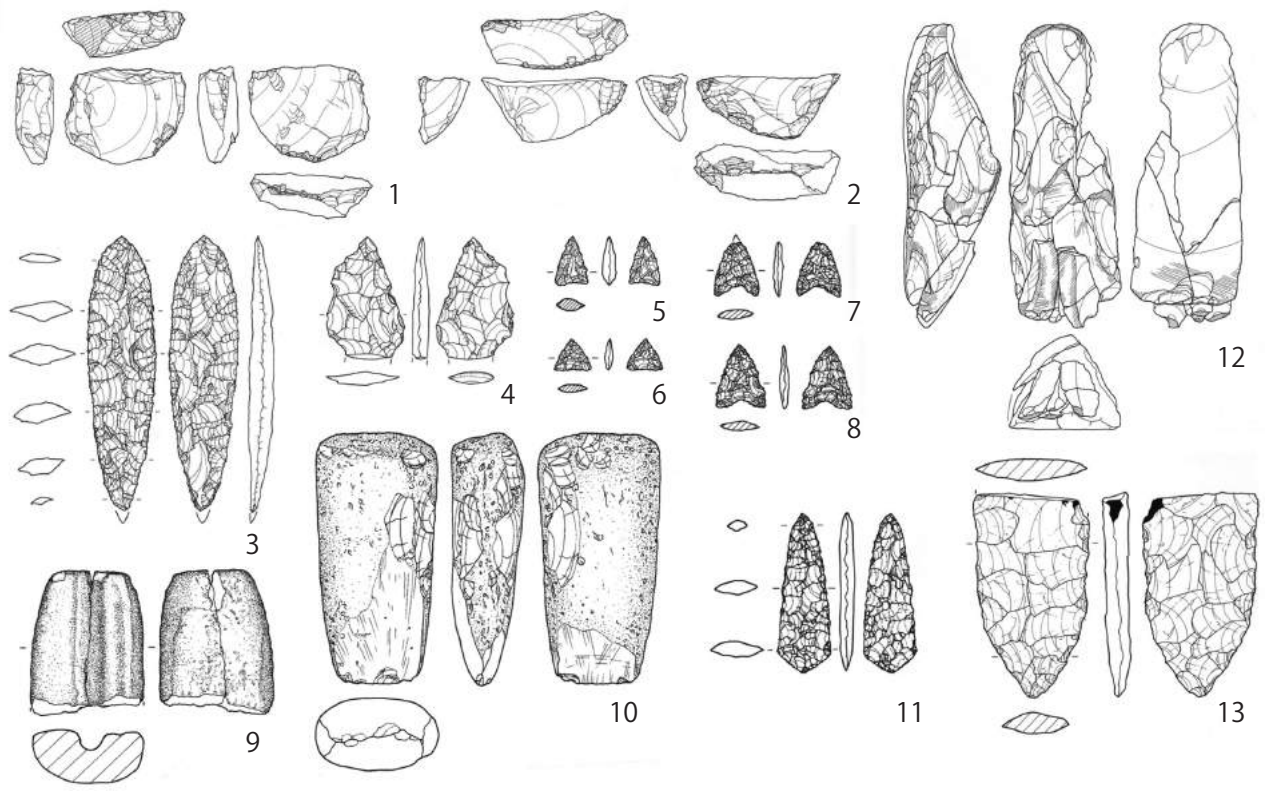
一九九七年の資料集成において金丸武司が県内の長者久保・神子柴文化関連遺物についてまとめている。この時点では九遺跡二一例が確認されたものの、確実な草創期初期の遺物包含層からの出土事例としては出羽洞穴の資料だけであること、大分県・鹿児島県の様相からは土器との共伴より細石刃文化期との関係がより密接であることを指摘している（金丸一九九七）。

この集成の後、白ヶ野第二・三遺跡（第5図12）や宮崎市田野町天神河内遺跡、高鍋町唐木戸第三遺跡で神子柴型石斧（の可能性がある資料）の出土事例が報告されている。

④　石鏃について

前回の筆者の集成では平面形が三角形のものはチャート、二等辺三角形のものは黒曜石やチャートの使用が目立つことを指摘した（第5図5・6）。また清武上猪ノ原遺跡第五地区で脚部の先端が尖る安山岩製の石鏃が多数出土しており、草創期の石鏃として特徴的で注目されると紹介している（第5図7・8、秋成二〇〇八b）。なお及川はこのタイプの石鏃について東京都もみじ山遺跡や八ヶ上遺跡、深見諏訪山遺跡に系譜があると述べている（及川二〇一四）。

出現期の石鏃については草創期の石器研究で必ず取り上げられる問題であるが、これまでの南九州の石鏃研究において出現期の資料として本県のものは取り上げられてはいない。本県最古の石鏃がどの遺跡の資料なのか、細石器との共伴関係や最古の土器にもかかわる問題であり大変興味深い。



1～4 阿蘇原上　5～10 清武上猪ノ原第5地区　11雀ヶ野第3　12 白ヶ野第2・3　13 清武上猪ノ原第2地区

第5図　県内出土の草創期石器実測図（S=1/3）

⑤　尖頭器について

松本によって旧石器時代から縄文早期までの資料集成が行われている。草創期の様相としては代表的な遺跡として阿蘇原上遺跡、清武上猪ノ原遺跡第二地区を挙げている。阿蘇原上遺跡では爪形文土器、隆帯文土器、細石刃石器群、両面調整石器を伴い、石鏃も含む可能性が高いとしている（第5図1～4）。細石刃核と爪形文土器から泉福寺洞穴の第六層に比定されるとしている。遠隔地の石材を用いないことについて、出羽洞穴Ⅲ層の資料とともにこの段階以降の五ヶ瀬川流域の地域性とも指摘している。

また清武上猪ノ原遺跡第二地区のサヌカイト製の薄手幅広の両面加工尖頭器（第5図13）については県内に類例がなく、同一層からは隆帯文土器・爪形文土器が出土しており、これらが同時期とすれば重要な編年的指標となる遺物であると述べている（松本二〇〇三b）。その後、松本はこの薄手幅広のサヌカイト製の尖頭器の類例として阿蘇原上遺跡の安山岩製の資料（第5図4）を挙げている（松本二〇〇三c）。

なお、阿蘇原上遺跡の評価については白石浩之が（細石刃核＋槍先形尖頭器）→（爪形文・隆帯文土器）という変遷案を提示しており、松本とは異なる見解を示している（白石二〇〇三）。

有舌尖頭器について、以前は分布の南限として高千穂町セベット遺跡の事例が有名であったが、日向市東郷町向原中尾第四遺跡、北牛牧第五遺跡、宮崎市清武町坂元遺跡、都城市高城町雀ヶ野第三遺跡（第5図11）と出土例が増えており、県内全域で確認されるようになっている。松本は北牛牧第五遺跡の資料について西之表市鬼ヶ野遺跡の尖頭器と類似すると述べ、今後本州・四国との有茎尖頭器との比較だけでなく九州南部地域との比較検討も視野に入れる必要性を指摘している。（松本二〇〇三c）

⑥　磨製石斧（第5図10）について

松本はセベット遺跡の丸ノミ型石斧の紹介を行い、内陸山間部で発見される丸ノミ型石斧の意味を知ることが当該期の生活者像を描く上で重要であると指摘している。また鹿児島県から宮崎平野部の隆帯文土器期には丸ノミ型石斧だけでなく多様な形態のものを含んでおり、時期をさかのぼる細石刃文化期の石斧の検討についても課題であると述べている（松本二〇〇四）。

藤木聡は宮崎県の縄文時代の石斧製作についてまとめており、草創期の石斧製作について塚原遺跡の事例を挙げている。この遺跡の石斧の使用石材は砂岩系と緑色珪質岩系のものに大別される。砂岩系のものはコッペパン状の原石を分割して背面側に礫の緩やかなカーブを残す断面かまぼこ状の石斧原形を獲得する。その後分割面側に対して縁辺から剥離を加え最終的に刃部表裏面から側面まで研磨し、やや丸みをもつ刃部を作り出す。緑色珪質岩のものも同様に素材礫の持つカーブを石斧器面に取りこんでいる。この器面に礫面を取り込む手法は剥離・敲打・研磨等を省くという石斧製作の効率化、固い礫表皮による強固な器面の獲得の実現が想定され、この手法は早期石斧にも続くと指摘している（藤木二〇〇五）。

このように狩猟具や石斧についての検討は行われているものの、各遺跡での石器組成や使用石材についての検討は本県ではあまり活発ではない。前述のとおり、宮崎県の場合は早期の遺物包含層中に草創期の遺物が混在することが多く、有文の土器以外の草創期の資料の把握が困難であることが石器研究に影響しているものと思われる。また包含層中の遺物の出土状況の検討についても後述する清武上猪ノ原遺跡第五地区の事例ぐらいである。遺構配置や石器組成などを考慮した各遺跡の居住活動の復元も今後の課題である。

六　近年出土した注目すべき遺物

このほかに近年出土した特徴的な遺物について紹介を行う。

①　丹塗り土器

塚原遺跡では内外面にベンガラを塗布した土器が出土している。その他に清武上猪ノ原遺跡でも爪形文土器の外面に赤色顔料が塗布された資料が出土している。

②　隆線文土器（第６図）

清武上猪ノ原遺跡第一・五地区で隆線文土器が出土している。細身の隆線上に押圧またはキザミが施されている。現在の編年観において有文の土器としては県内最古のものと位置づけられる。

③　矢柄研磨器（第５図９）

清武上猪ノ原遺跡第五地区では前述のとおり八個体の矢柄研磨器が出土している。いずれも砂岩製で、特に石英質が高いものが六点ある。平面形は長方形または卵形、断面形はかまぼこ状であり典型的な形状を呈している。本遺跡では矢柄研磨器はすべて住居の南西部で出土しており（第１図）、その付近では石器の出土率が高いことから集落内に道具の製作区域が設けられていたことがわかった。

④　土製円盤

清武上猪ノ原遺跡第五地区では焼成前穿孔の土製有孔円盤が出土している。また王子山遺跡では土製円盤や土製有孔円盤が一四点とまとまった数量が確認されており、隆帯文土器期に存在する土製品として捉えられるようになった

⑤　土製品（ミニチュア土器を含む）・石製品

塚原遺跡で釣鐘状の土製品が出土している。清武上猪ノ原遺跡第五地区では様々な形の不明土製品が出土している。その他に無文丸底の深鉢形と無文の皿形のミニチュア土器が出土している。これらのミニチュア土器は他に類例がないほど小さなものである。

また石製品としては王子山遺跡で表面がツルツルの石鏃形の白色の石製品や不明軽石製品が出土している。

七　その他の調査・研究成果

①　植物質食料について

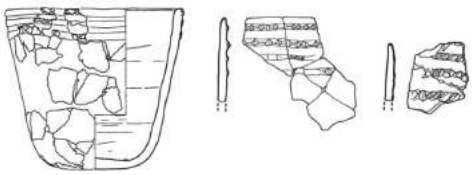
王子山遺跡では炉穴と考えられるＳＣ二八・三三からコナラ属の炭化子葉と炭化鱗茎類（ＳＣ二八はアサツキ‐ノビルとワケギという同定結果）が、ＳＣ三七からもコナラ属の炭化子葉が出土している。これらの炭化物については年代測定が行われており、その数値については後述している。なお各遺構からは隆帯文土器等の遺物も出土している。また土器圧痕レプリカ法によってツルマメ・エノコログサの種子が検出されている。そのほかに本遺跡から出土した磨石、敲石、石皿八点を対象に残存デンプン分析が行われており、そのうち七点からデンプンが検出された。このデンプン粒は鱗茎・根茎類や堅果類のデンプン粒の可能性が高いということである。

②　放射性炭素年代測定結果の蓄積について

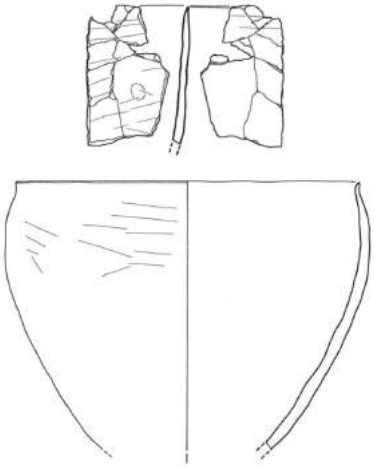
近年、隆帯文土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定法の結果がまとまってきており、その測定値からも他地域との時間的な並行関係を考えることができそうになっている。

測定結果は宮崎県において六点あり、補正年代で一二〇八〇±四〇ＢＰ～一一三五〇±七〇ＢＰという値が得られており、隆帯文土器の年代値は概ね一二〇〇〇～一一〇〇〇ＢＰの範囲に収まると考えられる。なお、隆帯文土器が主体となっている清武上猪ノ原遺跡第五地区の竪穴住居八棟から出土した炭化物からも補正年代で一一七二〇±四〇ＢＰ～一一三三〇±六〇ＢＰの数値が得られ、

同じく隆帯文土器主体の王子山遺跡の炉穴から出土した炭化物五点も補正年代で一一五〇五±三五ＢＰ～一一四三〇±三五ＢＰの数値が得られており、隆帯文土器付着炭化物の年代とも矛盾しない。この年代値は他地域でみられる爪形文系土器（萩谷二〇〇八）や円孔文系土器（谷口二〇〇八）と並行する可能性が指摘できる。



第6図　清武上猪ノ原遺跡出土
隆線文土器実測図（S=1/6）



第7図　清武上猪ノ原遺跡第5地区
SC313出土土器実測図（S=1/6）

このほかに清武上猪ノ原遺跡第五地区のＳＣ三一三から出土した無文土器の付着炭化物についても年代測定が行われており、一〇九〇〇±四〇ＢＰの年代が得られている（第７図）。この測定値によると本遺構の出土土器は隆帯文土器の次の段階に位置づけられると考えられ、水迫式土器との前後関係の把握が課題となる。

八　おわりに

近年の資料の大幅の増加によって南九州の初期縄文文化を日本列島全体の中で位置づけられるような調査成果が遺構・遺物の両面において散見されるようになってきた。すでに日本列島を俯瞰する視点から地域間の整合性を確認する研究が進められており（物質文化二〇一四）、草創期の研究は新しい段階へと突入している。

その一方で南九州という区域にひとまとめにされないように宮崎県の地域性を追求した今後の研究が望まれる。その進展によってより南九州の特徴が明らかになっていくことだろう。

宮崎県の縄文時代草創期研究の現状について概観してきたが、筆者の力量不足で取り上げることのできなかった研究や研究内容をきちんと読みとれなかったものもあるかもしれない。その点についてはご容赦いただきたい。

【註】今回の集成作業は前回と同様（秋成二〇〇八ｂ）、「縄文草創期は土器の出現から」という定義のもと行った。そのため土器を伴っていない細石刃核だけが出土している遺跡については集成していない。今後はこの点も検討のうえ、再度集成作業が必要となるだろう。なお、遺構の年代測定結果については隆起線紋土器が出土している福井洞穴Ⅲ層と土器が出土していないⅣ層の年代を参考（柳田二〇一四）に一三五〇〇～一〇〇〇〇ＢＰの数値が得られている遺構を取り上げている。

参考文献（調査報告書は紙面の都合上割愛した）

秋成雅博　二〇〇八ａ　「国内最大級の縄文時代草創期集落 - 清武上猪ノ原遺跡の調査 -」『月刊文化財』平成二〇年十一月（五四二号）、第一法規株式会社

秋成雅博　二〇〇八ｂ　「南九州の縄文草創期の様相（宮崎県の縄文草創期概観）」『九州旧石器』第一二号、九州旧石器文化研究会

秋成雅博　二〇一四　「宮崎平野部の貝殻押圧文土器について」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究 - 東九州道調査以後の新地平 -』、宮崎考古学会

雨宮瑞生　一九九一　「南九州の縄文草創期土器」『南九州縄文通信』№四、南九州縄文研究会

雨宮瑞生　一九九四　「南九州縄文時代草創期土器編年 - 太目の隆帯文土器群から貝

殻円筒形土器への変遷-」『南九州縄文通信』№八、南九州縄文研究会
雨宮瑞生　一九九七　「南九州縄文時代草創期土器編年（補遺）-他地域土器との関連性の模索-」『南九州縄文通信』№一一、南九州縄文研究会
今村結記　二〇一三　「南九州の縄文時代草創期～早期の様相」『第一〇回韓日新石器時代共同学術大会発表資料集　韓・日初期新石器文化比較研究』、韓国新石器学会
岩永哲夫　一九九三　「宮崎県の縄文時代草創期遺跡調査史」『南九州における縄文時代草創期の諸問題』、宮崎考古学会・南九州の縄文草創期を考える会
岩永哲夫　一九九七　「宮崎県の縄文草創期をめぐる調査略史」『宮崎県内における縄文草創期の遺物集成』、宮崎縄文研究会
大塚達郎　一九八四　「草創期の土器」『縄文土器大観』、小学館
及川　穣　二〇一四　「日本列島における出現期石鏃の型式変遷と広域連動」『物質文化』九四、物質文化研究会
遠部　慎・宮田佳樹　二〇〇八　「宮崎県における土器付着炭化物の炭素一四年代測定」『宮崎考古』第二一号、宮崎考古学会
鹿児島県考古学会・宮崎考古学会　一九九九　『旧石器から縄文へ』
金丸武司　一九九七　「宮崎県内の長者久保・神子柴文化関連遺物について」『宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』、宮崎縄文研究会
桒畑光博　二〇一五　「宮崎県王子山遺跡における縄文時代草創期遺構群の調査」『第一一回日韓新石器時代研究会発表資料集』、九州縄文研究会
国立歴史民俗博物館　二〇〇九　『企画展示　縄文はいつから⁉　一万五千年前に何がおこったのか』
児玉健一郎　二〇〇一　「旧石器時代から縄文時代へ-南九州の場合-」『第四紀研究』第四〇号、日本第四紀学会
児玉健一郎　二〇〇八　「南九州隆帯文・爪形文土器」『総覧　縄文土器』㈱アムプロモーション
小林　謙一　二〇〇六　「ＡＭＳ　Ｃ年代測定による縄文草創期・早期の年代研究」『九州縄文時代早期研究ノート』第四号、九州縄文時代早期研究会
寒川朋枝・福井俊彦・大西智和・桒畑光博　二〇一二　「宮崎県都城市王子山遺跡における植物利用についての検討-ウォータ・セパレーション分析と残存デンプン分析から-」『九州考古学』第八七号、九州考古学会
芝　康次郎　二〇一四　「九州地方における縄文時代草創期石器群の変遷」『第二一回考古学研究会東海例会　環境変化と人類活動-更新世から関心性への移行と東海地方の石器群-』、考古学研究会東海例会
下山覚・鎌田洋昭　一九九九　「水迫式土器の設定-南部九州の隆帯文土器から貝殻文円筒形土器への土器型式の変化について-」『ドキどき縄文さきがけ展』図録、指宿市教育委員会
白石浩之　二〇〇三　「九州等における有舌尖頭器の出現とその様相」『九州旧石器』第七号、九州旧石器文化研究会
新東晃一　一九九八　「南九州の特殊性-草創期を中心に-」『季刊考古学』第六九号、雄山閣
鈴木正博　二〇〇四　「岩土原への想い-「阿蘇原上式」の制定とその意義-」『九州縄文早期研究ノート』第二号、九州縄文時代早期研究会
谷口康浩　二〇〇八　「円孔文系土器」『総覧　縄文土器』、㈱アムプロモーション
寺原　徹　二〇〇六　「南九州における縄文草創期の諸問題」『南九州縄文通信』№一七、南九州縄文研究会
萩谷千明　二〇〇八　「爪形文系土器」『総覧　縄文土器』、㈱アムプロモーション
日高孝治　一九九九　「宮崎県における縄文時代草創期の様相」『鹿児島考古』第三三号、鹿児島県考古学会
藤木　聡　二〇〇五　「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」『Ｓｔｏｎｅ　Ｓｏｕｒｓｅ』№五、石器原産地研究会
物質文化研究会　二〇一四　「特集：縄文時代草創期と広域連動」『物質文化』九四
馬籠亮道・秋成雅博　二〇一五　「南九州の移行期」『季刊　考古学』第一三二号、雄山閣
松本　茂　二〇〇三ａ　「東南部九州における細石刃石器群編年に関する覚書-宮崎県岩土原遺跡第二文化層の再検討-」『富山大学考古学研究室論集　蜃気楼　-秋山進午先生古希記念-』、秋山進午先生古希記念論集刊行会
松本　茂　二〇〇三ｂ　「宮崎県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石

器』第七号、九州旧石器文化研究会
松本　茂　二〇〇三c　「草創期～早期の石器研究における諸問題（Ⅰ）-九州東南部の尖頭器を中心に-」『九州縄文早期研究ノート』第一号、九州縄文時代早期研究会
松本　茂　二〇〇四「草創期～早期の石器研究における諸問題（Ⅱ）-九州東南部における円ノミ型石斧の動向-」『九州縄文早期研究ノート』第二号、九州縄文時代早期研究会
水ノ江和同　二〇〇九　「Ⅳ　九州地方の縄文集落と「縄文文化」」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅰ　集落の変遷と地域性』、有山閣
宮崎県旧石器文化談話会　二〇〇五　「宮崎県下の旧石器遺跡概観」『旧石器考古学』第六六号、旧石器文化談話会
宮崎縄文研究会　一九九七　『宮崎縄文研究会資料集1　宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』
宮田栄二　一九九八　「縄文時代草創期の石器群-隆起線紋土器段階の地域性とその評価」『南九州縄文通信』№一二、南九州縄文研究会
宮田栄二　二〇〇〇　「南九州の縄文草創期-遺構と居住活動-」『旧石器から縄文へ-遺構と空間利用-』、日本考古学協会二〇〇〇年度鹿児島県大会実行委員会編
村上　昇　二〇〇〇　「九州地域に於ける縄文時代草創期土器編年試論」『南九州縄文通信』№一四、南九州縄文研究会
村上　昇　二〇〇七　「日本列島西部における縄文時代草創期土器編年-南九州地域を中心に-」『日本考古学』第二四号、日本考古学協会
村上　昇　二〇一四　「九州における爪形文土器の編年上の位置づけについて」『物質文化』九四、物質文化研究会
森田浩史・桒畑光博　一九九七　「宮崎県縄文時代草創期の土器について」『宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』宮崎縄文研究会
柳田裕三　二〇一四　「コラム　福井洞窟-長崎県佐世保市-」『季刊考古学』第一二六号、雄山閣

（表１）宮崎県下の縄文草創期の遺跡一覧①

番号	遺跡名	所在地	検出遺構	主要遺物等
1	出羽洞穴	西臼杵郡日之影町		尖頭器・石斧、原産地遺跡
2	セベット	西臼杵郡高千穂町		有舌尖頭器・丸ノミ型石斧
3	阿蘇原上	西臼杵郡高千穂町		爪形文・隆帯文・細石器・尖頭器
4	山田	延岡市小川町	陥し穴１	細石器・尖頭器
5	蔵田	延岡市北方町		隆帯文・石鏃？
6	岩土原	延岡市北方町		細石器・隆帯文
7	笠下	延岡市北方町		尖頭器
8	岡・９次	日向市	集石遺構１	
9	向原中尾第４	日向市東郷町		有舌尖頭器
10	辰之元	東臼杵郡北郷村		尖頭器
11	朝草原	児湯郡都農町	礫群１	無文・細石器
12	立野第５	児湯郡都農町	集石１	細石器
13	霧島	児湯郡川南町		無文・爪形文・細石器
14	国光原	児湯郡川南町	集石１？・土坑１	隆帯文・爪形文・石鏃？
15	八幡第２	児湯郡川南町	集石１	隆帯文・石斧
16	前ノ田村上第２	児湯郡川南町	土坑群？・集石遺構１	隆帯文・無文・細石器
17	登り口第１	児湯郡川南町		爪形文
18	尾花Ａ	児湯郡川南町	竪穴状遺構１	隆帯文・爪形文・貝殻押圧文
19	虚空蔵免	児湯郡川南町		隆帯文
20	赤石・天神本	児湯郡川南町		隆帯文・爪形文・石鏃・石錐・楔形石器
21	市納上第２	児湯郡川南町		刺突文・細石器
22	前ノ田村	児湯郡川南町		隆帯文
23	野首第２	児湯郡高鍋町		爪形文・細石器
24	北牛牧第５	児湯郡高鍋町	炉状遺構１	無文？・細石器・有舌尖頭器・石鏃？
25	牧内第１	児湯郡高鍋町	土坑２・環状ピット群？	爪形文・隆帯文？・石鏃？
26	牧内第２	児湯郡高鍋町		隆帯文・石鏃？
27	唐木戸第３	児湯郡高鍋町	炉状遺構１・陥し穴１	細石器・神子柴型石斧？
28	唐木戸第４	児湯郡高鍋町		無文？・細石器
29	老瀬坂上第３	児湯郡高鍋町		隆帯文・水迫岩本・細石器
30	崩戸	児湯郡高鍋町		隆線文？・隆帯文・尖頭器・細石器
31	瀬戸口	児湯郡新富町		隆帯文・細石器・石斧？

（表２）宮崎県下の縄文草創期の遺跡一覧②

番号	遺跡名	所在地	検出遺構	主要遺物等
32	西畦原第２・２次	児湯郡新富町	陥し穴２	細石器
33	西畦原第２・３次	児湯郡新富町	陥し穴２	細石器
34	東畦原第１・２次	児湯郡新富町	陥し穴１	細石器・石鏃？
35	東畦原第１・４次	児湯郡新富町		石鏃
36	勘大寺・２次	児湯郡新富町	陥し穴１	
37	小判屋敷	西都市		神子柴型石斧
38	別府原	西都市	陥し穴３・炉穴１？	隆帯文・水迫岩本
39	都於郡城	西都市		石斧
40	隠山	宮崎市佐土原町	集石遺構６？	爪形文・円孔文？
41	野地	宮崎市佐土原町		尖頭器？
42	上ノ原	宮崎市佐土原町	陥し穴１	細石器
43	堂地西	宮崎市	集石３	隆帯文・爪形文・岩本・石斧・石鏃・細石器
44	車坂第２	宮崎市		水迫
45	山下第１	宮崎市		水迫岩本
46	椎屋形第１	宮崎市	集石２	隆帯文・爪形文・貝殻押圧文・石鏃・丸ノミ型石斧
47	椎屋形第２	宮崎市		隆帯文・爪形文
48	上の原	宮崎市		爪形文・水迫岩本・尖頭器？
49	須田木	宮崎市清武町		岩本・細石器
50	清武上猪ノ原・第１	宮崎市清武町	集石１	隆線文・隆帯文・貝殻押圧文・水迫岩本
51	清武上猪ノ原・第２	宮崎市清武町	集石２	隆帯文・爪形文・尖頭器・石鏃
52	清武上猪ノ原・第４	宮崎市清武町		隆帯文・細石器・石鏃
53	清武上猪ノ原・第５	宮崎市清武町	竪穴住居 14・集石２・土坑 19・炉状遺構２・土坑群？	隆線文・隆帯文・貝殻押圧文・無文・岩本・細石器・石鏃・尖頭器・丸ノミ型石斧・矢柄研磨器・ミニチュア土器・土製有孔円盤・丹塗り土器、安山岩使用
54	白ヶ野第２・３	宮崎市清武町		爪形文・細石器・神子柴型石斧
55	滑川第１	宮崎市清武町		爪形文・岩本・細石器？
56	滑川第３	宮崎市清武町	集石１・陥し穴状遺構？２	
57	山田第１	宮崎市清武町		爪形文・無文・石鏃？
58	山田第２	宮崎市清武町		爪形文
59	坂元	宮崎市清武町	集石１	水迫岩本・有舌尖頭器
60	下猪ノ原・第２地区	宮崎市清武町		隆帯文
61	上の原第１・B 地区	宮崎市清武町		隆帯文？
62	杉木原	宮崎市清武町		隆帯文・爪形文・岩本
63	岡第４	宮崎市清武町		隆帯文
64	札ノ元	宮崎市田野町		尖頭器
65	芳ヶ迫第１	宮崎市田野町		岩本
66	芳ヶ迫第３	宮崎市田野町		爪形文
67	井手ノ尾	宮崎市田野町		爪形文・水迫岩本・尖頭器
68	元野河内	宮崎市田野町		隆帯文・爪形文・尖頭器
69	青木	宮崎市田野町		隆帯文
70	黒草第２	宮崎市田野町		隆帯文・岩本・細石器
71	七野第４	宮崎市田野町		隆帯文
72	砂田	宮崎市田野町		隆帯文・爪形文・水迫岩本
73	天神河内第１	宮崎市田野町		隆帯文・神子柴型石斧
74	茶屋原	宮崎市高岡町		爪形文
75	小平谷第１	東諸県郡綾町		隆帯文
76	木脇	東諸県郡国富町		隆帯文・貝殻押圧文
77	塚原	東諸県郡国富町	集石２・石列１？・石器埋納遺構１	隆帯文・爪形文・細石器・石鏃・丸ノミ型石斧・刺突文・釣鐘状土製品・丹塗り土器
78	内屋敷	小林市	配石遺構３？	岩本
79	堀浦	えびの市		丸ノミ型石斧
80	雀ヶ野第３	都城市高城町		細石器・有舌尖頭器
81	堂山・南地区	都城市		隆帯文
82	水上第２	都城市		無文
83	王子山	都城市山之口町	竪穴状遺構４・土坑 10・炉穴 30・集石遺構６？・配石遺構８	隆帯文・貝殻押圧文・爪形文・細石器・石鏃・土製有孔円盤・石鏃型石製品・軽石製石製品
84	軍人原	都城市高城町		無文・細石器
85	川原谷出水	都城市		隆帯文・無文？
86	大平	串間市		隆帯文
87	三幸ヶ野第２	串間市	集石２・土坑１・配石遺構？	隆帯文・爪形文
88	西ノ園	串間市		隆帯文

「絵はがきの語る歴史」

宮崎県地域史研究会
武田　信也

目次

はじめに―一枚の絵はがきが語るもの

皇太子（大正天皇）行啓と絵はがき
　1　当時の絵はがきをめぐる環境
　2　行啓紀念（記念）絵はがき発行の経緯

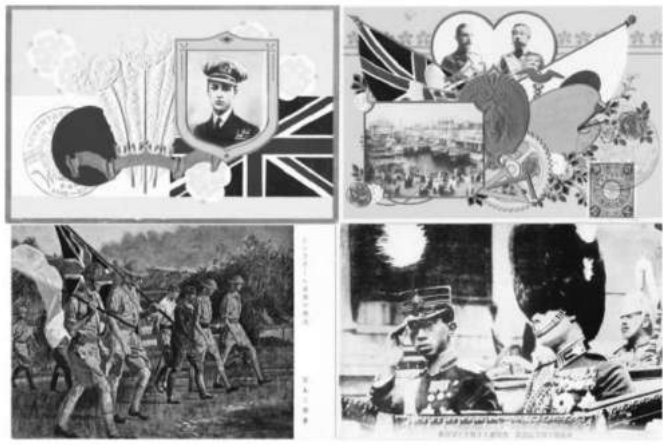
地元発行絵はがきの一事例
　1　宮崎線開通のインパクト
　2　個人での絵はがき発行事例
　3　大正九年皇太子（昭和天皇）行啓

絵はがきに見る観光エリア
　1　一次交通から二次交通へ―別府の先行事例
　2　二次交通による名所旧跡の選択―宮崎における遊覧バス
　3　風景（名所）絵はがきのパック化の実例

おわりに

はじめに―一枚の絵はがきが語るもの

ここに一枚の絵はがきがある。以前、この絵はがきを祖母に見せた際、祖母は日露戦争の一場面を描いた絵画(1)であると分かると「リョジュンカイジョウヤクナリテ、テキノショウグンステッセル、ノギタイショウトカイケンノ、トコロハイズコ、スイシエイ」と歌い始めた。「コン歌を知っちょいナ?」と訊かれたが、筆者は何という歌かは分からなかった。後日調べると、「旅順開城約成りて、敵の将軍ステッセル、乃木大将と会見の、所はいずこ、水師営」の歌詞は、文部省唱歌「水師営の会見」にあった(2)。日露戦争における旅順要塞陥落後、日本の乃木将軍とロシアのステッセル将軍の会見を歌ったもので、絵画に描かれた場面でもある。



絵はがきに見る近代日英関係の変遷

「日露役旅順開城」

一枚の絵はがきによって、記憶の引き出しを開けた祖母が思い出したのは、子供時代の唱歌であった。

絵はがきは、個人の小さな歴史だけでなく、大きな歴史を語ることもある。例えば、近代日英関係の移り変わりを示す、次の四枚(右上から日英博覧会・東宮殿下御渡欧記念・英国皇太子殿下御来遊・シンガポール英軍の降伏)を年代順に並べると、桂太郎内閣の外務大臣、小村壽太郎が結んだ、明治三十五(一九〇二)年の日英同盟からわずか四十年で、日本とイギリスは交戦国となってしまったことがわかる(3)。

このように並べ替えが可能なのは、絵はがきの背景である製作年代や作成経緯が正確に分かるということが前提である。この画像資料活用のための前提は、三十五年前、NHKの荻昌朗氏と国立民族学博物館の梅棹忠夫館長による、映像資料についての対談の中でも言及されており、

荻　わたしどもライブラリアンの立場でかんがえると、映像そのものがあっても、これがいつ、どこで、何を写したかという文字の記録をともなっていないと、映像の価値がでてこないんですね。自分が撮った映像ならばわかっていても、ほかの人はその映像を見ただけではつかえないし、だいいち、さがしだせない。そのへんを解決しなければいけないとおもっています。

言語情報をともなわない映像情報は価値がひくい。言語情報と映像情報は両方がくっついていなけりゃだめなんです。動的映像情報だけでなく静的映像情報―写真についても克明なデータがなけりゃだめだということですね。写真だけで、ことばはいらないというのは、うそです。

梅棹

と述べている(4)。絵はがき(画像資料)の書誌情報や収蔵品情

報が空白という状態は、『博物館の世界』で言うところの「言語情報をともなわない映像情報は価値がひくい」状態であり、保存機関としては不十分なことだと実感させられる。

絵はがきの整理分類に先行したのは、博物館などに所属しない収集家であった。島田健造氏の『日本記念絵葉書総図鑑』では、逓信省発行絵はがきをはじめとして、当時の日本国内、海外植民地等発行の絵はがきについて、作成背景を詳しく調査している(5)。

二十年以上前に、佐藤健二氏が絵はがきについて「書誌学も古文書学もほとんど周辺に追いやってきた」(6)と指摘した頃、史(資)料保存の現場に入った人間の経験では、絵はがきを保存はしていても、どのように活用すればよいか分からないのが実情であった。筆者がかつて勤務した大分県公文書館では、大分県に関する地域資料として絵はがきを受け入れていたが、在職四年間で広報誌に一度掲載したくらいで、企画展などにも出さなかった。同じ建物の先哲史料館が展示に出す、大友宗麟の書状などには、とても公文書館の資料は太刀打ちできないと考えていたからである。ただ、十年二十年先の将来は何が貴重になるかわからないということで、担当職員と検討しながら、明治時代の写真帖や初三郎の鳥瞰図などと共に、なるべく絵はがきも公文書館へ受け入れていた。

現在は、絵はがきの画面だけを眺める段階を過ぎ、整理を行った絵はがきをメインにして、展覧や展示を行える段階に来ている。生田誠氏は、百種類の絵はがきについて分類を行い、カタログを作成したが、ジャンルによっては特定困難な作成時期についても調査特定している(7)。学習院大学史料館では、大正時代の通史を描く展示資料として活用され(8)、和歌山大学紀州経済史文化史研究所の展示では、作成の主体、作成の背景、製造の方法など絵はがき画面の裏側にも着目している(9)。國學院大學の絵はがき資料目録の成果もあるが(10)、各機関の事例は、地道な整理の結果であり、今後絵はがきの受け入れ、整理、展示などへの活用を行う際参考になるものである。

宮崎県内では、絵はがきについて『宮崎県史』に民俗分野での言及がある。「様々な映像資料は、対象物とともに時代や暮らしの姿を映し出す、得がたい民俗表現の記録である。それらを通して、当時の社会環境や風俗・流行などを多角的に窺い知ることができる」と前置きし、静止映像の素材や映像表現の一つとして絵はがきを挙げる(11)。絵はがきは民俗の対象分野と説明されていたが、具体的な分析や考察はなかった。

『宮崎県史』以後、絵はがきのような文書以外の紙資料について、倉真一氏、長谷川司氏の研究がある(12)。倉氏、長谷川氏の研究は、サンプルをある程度集積した上で分析した研究であり、戦前における青島絵はがきの変遷や、今回関わるものとしては遊覧バスのパンフレット分析を行っている。

歴史分野が絵はがきを分析の対象としてこなかったのは、例えばいつ作られたかがはっきりしないなど、「いつ、どこで、だれが、なにを」を確定する、史料批判に耐えられない性格を元来持っているからである。画面さえ見えれば、戦前と戦後すら関係ないというのは、趣味ならともかく研究では通らない。絵はがきという「映像情報」を生かすために、年代や作成背景といった「言語情報」を可能な限り見つけるのである。例えばケネス・ルオフ氏は、戦前の日本における観光とナショナリズムの研究に、絵はがきなど画像資料を活用し、宮崎における聖蹟観光ついても考察を行っている(13)。

現在は、通信面が明治四十(一九〇七)年に三分の一、大正七(一九一八)年に二分の一に拡大され、昭和八(一九三三)年に「郵便はかき」から「郵便はがき」表記へ変わることが、絵はがき作成年代を判定する目安となることも広く知られている(14)。『宮崎県史』で示された対象分野を、今回は歴史の側が踏み超える形になる

が、一連の具体的な分析や考察を経た以後には、絵はがきを含めた画像資料は、歴史学の対象分野でもあるとしたい。

皇太子（大正天皇）行啓と絵はがき

1　当時の絵はがきをめぐる環境

明治三十七（一九〇四）年に始まった日露戦争も後半に入ると、戦意高揚や軍事郵便のため、逓信省は記念絵はがきを発行した(15)。

国民の士気を高めるために、逓信省は戦役記念の絵葉書を発行した。三十七年九月、第一回の六枚を発行したのに始まり、戦争が終わった三十八年十月の第四回（三枚一組のものを五組）に及ぶ。これが、ものすごい人気を呼んだ。遼陽（リャオヤン）の会戦、旅順の陥落、奉天（瀋陽）の会戦と、戦局が進むにつれて、記念絵葉書の人気は上昇する一方であった。

『日露戦役紀念絵葉書』

国内における逓信省発行絵はがきブームは、生方敏郎も書いているが遼陽、沙河戦勝の頃から「とにかくこの三枚一組戦捷記念絵葉書の景気は素晴らしいもので、郵便局へ早く買いに行かないと、じきに売り切れてしまう。」(16)というものであった。『日本記念絵葉書総図鑑』(17)によると、日露戦争に関する逓信省絵はがきの発行数は第一回（四十一万五千組）第二回（六十万組）第三回（五セット各十三万四千組）第四回（五セット各十四万組）、第五回（一セット十万組）となっている(18)。戦争が終わっても絵はがきの人気は衰えない。

こえて三十九年四月、凱旋観兵式が行われた。このときは絵葉書のほかに記念切手も発行され、特殊通信日附印が使用された。つづいて五月六日には、さらに戦勝を祝う絵葉書が発行される。ブームは頂点に達した(19)。

樋畑雪湖（正太郎）も絵葉書趣味高潮時代の光景として「第五回戦役紀念葉書の出た頃が最も高潮に達した時代で明治四十年即ち西暦千九百七年前後が單に日本といはず、歐羅巴に於ても最も盛んであつたのである。」(20)と回顧している。

絵はがき販売新聞広告

この頃の新聞広告に、絵はがき販売広告がある。ミスマン商会は大阪から地方紙に広告を出していて、最新の絵はがきとして「懸賞當選拾美人」「コミツク」「コロタイプ販景色及美人花鳥」などの商品を取り扱っていた(21)。これらの記録からは、絵はがきを取り巻く当時の世相が見えてくる。

2　行啓紀念（記念）絵はがき発行の経緯

明治四十年、皇太子（大正天皇）は朝鮮半島から南九州と四国各県を巡回する形で行啓を行い、宮崎県もその対象県となった。

皇太子行啓に際して、宮崎県は絵はがきを発行している。これについては『宮崎縣行啓誌』に、当時の記録が残されている(22)。

縣費金四百八十圓ヲ投シテ繪葉書八千組ヲ發行シ行啓記念トシテ先ツ　殿下ニ獻上シ次ニ供奉員一行、御召艦竝ニ護衛艦隊乗組員、行啓關係職員、郡長、議員、町村長、拝謁者、奉拝者、新聞記者及來縣セル主ナル公私人等ニ配布シ別ニ私人ヲシテ發賣セシメタルニ五十組御買上ノ恩命ヲ拜セリ繪葉書ノ意匠ハ逓信屬樋畑正太郎ノ考案ニ成ル一葉ハ上半部ニ皇太子旗ヲ顕シ其御紋章中ニ　殿下ノ御肖像ヲ奉掲シ下半部ニ御旅館タル紫明館及御召艦香取ノ寫眞ヲ配シテ地ヲ黄色トシ皇式御調度ノ古式ヲ模シテ竹及桐ノ浮出模様ヲ描ケリ他ノ一葉ハ白色浮出ノ月桂樹ノ額縁ノ中ニ官幣大社宮崎宮ノ寫眞ヲ掲ケ地紋ハ朝廷大儀ノ時ニ用ヒサセラル、近衛次將ノ矛ニ附シタル飛札ノ模様ヲ紫色ニテ描キ出セリ〔以下略〕

「行啓記念絵葉書」

樋畑正太郎（雪湖）は、明治三十三（一九〇〇）年の私製絵はがき制度以来、二十有余年間逓信省にあって、「絵葉書図按主任」として奉職していた人物である。その絵はがき図案の製作姿勢は「皇室の大典・國家の重なる出來事を根據ある寫眞若は畫圖によりて之を後世に傳ふべき史的紀念繪葉書を忠實に其作製に從事」したと自ら述べており、デザインを依頼した県の意気込みが感じられる(23)。

樋畑のデザインでは、皇太子旗と肖像を組み合わせて配置し、皇太子の正服とされた「黄丹衣」(24)の色である黄赤系の色を地色に使用し、儀仗用の矛から意匠を取るなど、皇室の意匠や朝廷の故実に基づいてデザインが行われている。皇太子旗は朱赤系の色に金で内枠と菊花紋を描くので、はがきは上半分朱赤色、下半分黄赤色という派手なものになった。

平成二十六（二〇一四）年、県立図書館「宮崎の新聞」展では、行啓に際して宮崎の地元新聞『日州』が掲載した、皇太子肖像を展示紹介しているが、原武史氏の研究(25)で明らかになったように、全国でも早い皇族肖像の新聞掲載事例であった。これは紀念(記念)絵はがき発行についても全く同様であり、九州の宮崎県、大分県は、原氏が事例を紹介した東北各県の行啓記念絵はがき(26)よりも先行して、皇太子肖像を使用したことが歴史的にも評価できるのである。

『大分県行啓記念絵葉書』

同時期に県が製作した写真帖（『宮崎縣寫眞帖』）があるので、絵はがきはデザインに凝ったものに作られた。大分県製作のものにも言えることだが(27)、デザイン化の傾向は、数年前に大ブームとなった日露戦役紀念絵はがきの影響も考えられる。一連の戦役紀念はがきは、デザイン化された画面に写真を取り込んで構成されており、「紀念（記念）絵はがき」の模範を逓信省が示しているのである。しかもこれが全国に流通したことは、大量の発行枚数が示している。

同時期、『宮崎宮竣工奉告大祭紀念繪葉書』など県以外の発行に係る紀念（記念）絵はがきも、デザイン化されたものが想像できる。

『宮崎縣寫眞帖』は現在も多くの公立図書館に所蔵されている。写真帖が広く一般の目にふれることで、どこの風景をどのように写すかについて、写真帖の撮り方やアングルは影響を与える。これは、写真帖以後に我が町・我が村の風景（名所）絵はがきを製作する際には特に示唆を与え、参考となるだろう。

『宮崎線案内』

地元発行絵はがきの一事例

1　宮崎線開通のインパクト

鉄道開通以前、明治四十年に宮崎宮造営奉告祭記念として県内で作られた『宮崎縣案内記』(28)などはあったが、鉄道関係機関における宮崎の紹介はほとんどなかった。例えば明治四十三（一九一〇）年の『鐵道院線沿道遊覧地案内』を見ると、廻遊旅行の栞では、予定日数十日の九州縦断で「更に熊本より南し、八代より人吉まで、車窓球磨川の奇勝を眺め、鹿児島に入りて大西郷の故郷を見る」と熊本以南では現在の肥薩線、日豊線（隼人・鹿児島間）沿線のコースが提案されたにすぎない(29)。

大正五（一九一六）年の鉄道開通によって、宮崎は中央とつながったが、九州鉄道管理局は『宮崎線案内』(30)を発行し、宮崎線沿線（現在の吉都線・日豊線都城宮崎間）名所を案内している。この案内は、国有鉄道当局の印刷物に宮崎県内が紹介されたものである。

表『宮崎線案内』に紹介された各駅の名所旧跡等

駅名	紹介された名所旧跡等	備考
京町駅	吉田温泉	
加久藤駅	加久藤、加久藤城址、白鳥温泉	
飯野駅	龜城の址、狗留孫神社	
小林町駅	小林町、伊東塚、霧島峯神社	
高原駅	狭野神社、霧島山、霧島登山道	
谷頭駅	母智丘神社	
都城駅	都城町、官公衙其他、主なる旅館	
青井嶽駅	青井嶽隧道	
清武駅	安井息軒誕生地	
大淀駅	伊萬福寺、生目神社、青島、内海港、鵜戸神宮	宮崎軽便鉄道沿線含む
宮崎駅	官公衙其他、主なる旅館、小戸神社、安楽寺、天神山、宮崎神宮、景清廟、一葉の浜、住吉の浜、都萬神社、西都原	県営軽便鉄道沿線含む

※高崎新田、三股、山之口、田野駅は記載なし。

現在のえびの市から宮崎市方面に向けて案内が進んでゆくが、京町、加久藤、飯野、小林町各駅は、中世伊東島津両氏に関係する名所旧跡を紹介している。高原駅は、霧島に近い登山口であることをアピールする。西諸県郡の地域に比べると、都城駅など北諸県郡の地域は資料を提供しなかったのか、町の説明だけで名所の記載がほ

とんどなく、駅名しかないところもある。大淀駅と宮崎駅の項目では、接続する軽便鉄道沿線を含めて紹介しているので、青島や西都原古墳群までがエリアに入る。この大正五年十月から十一月頃は、地元でも官民それぞれで、鉄道開通を契機に作成されたガイドブックが現れる。宮崎県は『宮崎縣案内』を刊行した(31)。『宮崎名所』は県内全域の名所案内記で、多くの図版を添え、県庁や官公署、市街地、西都原、高千穂なども紹介する(32)。当時宮崎まで伸びた鉄道は「九州文明の東漸は、愈急行列車的速度を以て、ボギー車の鐵路を走る響きと共に、朝な夕なに輸り込んで來る」という印象で迎えられ、「すべての活動に新しい生氣を帯び、何か知らず潑溂と躍つて居るのが見える。」(33)という活気をもたらしていた。

泉亭絵はがき

2　個人での絵はがき発行事例

先の明治四十年行啓の際、新聞広告に「大祭會紀念日向名所繪葉書各種卸小賣」とあって(34)、当時の宮崎における風景（名所）はがきの作成販売が分かる。官製の絵はがき以外にもいくつかの私製絵はがきが作成販売されていた傍証である。

大正時代の宮崎県内おける、個人での絵はがき発行が行われた事例を取り上げてみたい。泉亭は、紫明館と並んで宮崎における有力料亭であった。裏面を見ると通信欄スペースが三分の一あるので、大正七年以前の作成とわかる。

明治二十三（一八九〇）年の『日隅薩商工便覧』には、「集會席　宮崎松山町泉亭　緒方冨三郎」(35)とあり、大淀川河畔の料亭として、大小の帆船や遊覧船が往来する様子と共に絵入りで紹介される。また『宮崎名所』では、宮崎町の案内の中で(36)、「若し夫れ一陶の醉を買はんとならば、松山町の「泉亭」か「紫明館」、乃至又た下太田の「水光館」か、」とある。発行元の植村写真館は、館の建物写真が大正四（一九一五）年の『宮崎縣大觀』にも収められるが(37)、この『大觀』で写真主任を務めた植村不散が経営していた(38)。

当時絵はがきは、写真館が主に発行していた。先に『宮崎名所』を発行した三島信太郎も、商工案内では「寫眞繪ハガキ　橘通三丁目　三島信太郎」と紹介され、写真と絵はがきを扱っていたことがわかる(39)。絵はがきは「三島天眞舘」として宮崎神宮、青島など日向名所を発行していた(40)。

作られた泉亭の絵はがきを見ると、床の間や、掛け軸、調度品など座敷内部はほとんど写らない。「大淀川ヨリ望ム」とキャプションを付け、川面（船目線）からの料亭外観を写すなど、借景としての大淀川沿いの立地をアピールしたりもする(41)。同じく大淀河畔にある

大淀川鉄橋（『宮崎縣写真帖』）

泉亭と大淀川鉄橋

『小林名所軍馬ノ櫻繪はかき』

神田橋旅館も、「大淀河畔に面し」「四季風光絶佳」と広告し、大淀河畔の風景を紹介している(42)。大正五年の『宮崎縣寫眞帖』(43)にも、鉄橋が景勝地の一つとして撮影されるが、「鉄道の景観」が絵になるという当時の意識が見える。鉄橋と汽車が映り込む泉亭の絵はがきは、「大廣間ヨリ鐵橋ヲ望ム」とキャプションがつけられており、大淀川と同様に「鉄道の景観」を積極的に借景として取り込んだ結果である。

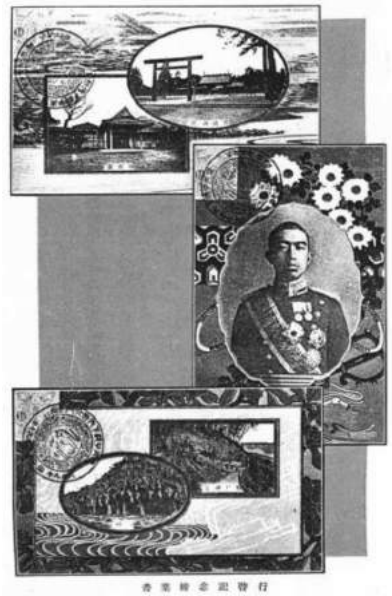
絵はがきは宮崎町内だけでなく、県内各地の写真館や書店が発行元になる。都城町では上町海江田書店が、町外の五十市村に当時駐屯していた歩兵第六十四連隊正門を絵はがきとし(44)、小林町の例では、陸軍軍馬補充部の桜並木を写したものが、町内の土橋写真館や格〔柊〕山写真館からそれぞれ発行されている(45)。

3　大正九年皇太子（昭和天皇）行啓

大正九（一九二〇）年に皇太子（昭和天皇）の行啓が行われた。この時にも絵はがき製作の記録が残されている(46)。

東宮行啓紀念繪葉書ヲ東京株式會社警眼社ニ命シテ謹製セシメ殿下ニ獻上シ尚賓客竝行啓關係者等ニ頒贈シタリ三枚一組トシ包紙ハ神社屋根ノ側面ニ杉林ヲ配シ下方ニ黄心樹（オガタマノ樹）ノ實ヲ描出ス葉書一葉ハ八咫鏡ノ中ニ　殿下ノ御肖像ヲ謹寫シ白菊一枝、縣徽章、劒璽ヲ周圍ニ配シタリ一葉ハ宮崎神宮ト御旅館御玄關トヲ収メ霧島山と大淀川トヲ上下ニ配合シ一枚ニハ周圍ニ黄心樹ノ果實ヲ描キ鵜戸神宮御窟屋、青島、蒲葵林ヲ駢べ繞ラスニ岩壁ト潮流トヲ以テシタリ何レモ高雅鮮麗ノ製作ナリ

宮崎縣寫眞帖ハ縣内著名ノ神社市街地港灣其他景勝ノ地ヲ撮影セルモノニシテ登載寫眞数五十一枚裏面ニ簡単ナル説明ヲ附セリ



「行啓紀念絵葉書」

県は、絵はがきと同時に写真帖を作成しており、官公署製作の紀念（記念）絵はがきの、印刷物としての立ち位置がわかる。県が製作する写真帖とは役割分担があり、風景絵はがきを作成したところで「縣内著名ノ神社市街地港灣其他景勝ノ地」を写した写真帖と重複する。紀念（記念）絵はがきは、写真帖のように全面風景写真のみで構成するのではなく、県章をあしらうなどデザイン重視で作られる。明治四十年の絵はがきに比べると、宮崎県の風景（霧島山と大淀川）が背景に描かれ、鵜戸神宮や青島の枇榔樹の写真が取り込まれるなど、より県の個性を出したものになっている(47)。

絵はがきに見る観光エリア

1　一次交通から二次交通へ―別府の先行事例

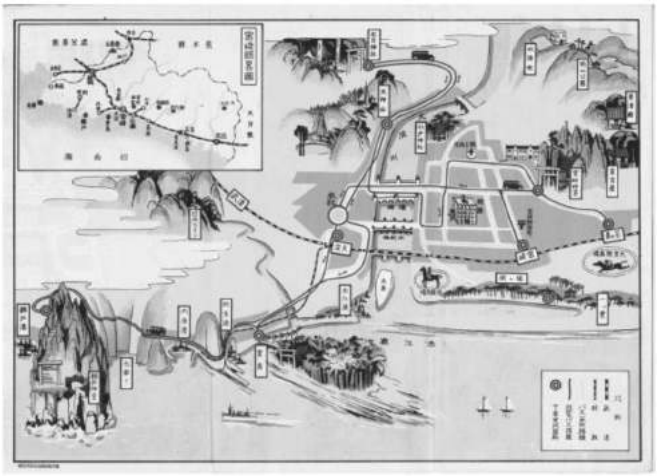
大正十三（一九二四）年に作られた『鐵道旅行案内』で「別府の温泉か、温泉の別府か」(48)と紹介される別府は、田山花袋の『温泉めぐり』(49)でも評価が高い。別府の場合「此間鐵道は亀川、別府、濱脇の三駅を置く、温泉巡り地獄巡りには別府亀川から乗合又は貸切自動車があり、乗合一人貳圓八十銭、約二時間半、歩いても八九時間で充分である」と『鐵道旅行案内』に見え(50)、鉄道や船（一次交通）の整備が進むと、到着地から先のバス・タクシーなど市内交通（二次交通）の整備も進むようになることがわかる。

昭和四（一九二九）年の『名所案内』には「殊に別府からは亀の井の大型遊覧自動車が二十五分毎に出て、運轉中附近の名所について詳しく面白く説明してくれる」と名所を結ぶ形で遊覧バスが走る様子が見え、別府は遊覧バスの先駆けとなっていた(51)。別府では、この遊覧バスに関する絵はがきも作成されている(52)。

2　二次交通による名所旧跡の選択―宮崎における遊覧バス

宮崎では、宮崎バス株式会社（宮崎交通の前身）社長岩切章太郎により、昭和六（一九三一）年遊覧バス事業が立ち上がった(53)。

『宮崎名勝遊覧バス案内』(54)は、倉氏、長谷川氏の分類では二番目に作られたパンフにあたる。この昭和八（一九三三）年に宮崎バスが作成した、遊覧バスのパンフを読んでみると、下車案内箇所は「花ケ島、宮崎、大淀」各駅と「宮崎神宮、一ッ葉、生目神社、天神山、青島、鵜戸神宮」となっており、青島と鵜戸神宮以外は自社のバス路線上の名所が選択されている。また県庁や橘通などの市街地、学校、橘橋も通過するルートになっている。これを十八人乗り、二十五人乗りバスで四時間半（鵜戸神宮を含めて七時間）かけて運行したのである。



『宮崎名勝遊覧案内』

当時は、名所の一部は生目村、青島村、鵜戸村であり、宮崎市とは別である。バス会社は路線上の名所をつなぐことで、行政区域とは異なる宮崎周辺の観光エリアを形成しつつあった。

ここで時間を遡り、遊覧バスに至るまでの名所旧跡について振り返ることにする。明治四十年の『宮崎縣案内記』には、宮崎町近辺では景清廟所、ほかに、宮崎城址を始めとする中世城郭址、権藤種盛父子の墓、古戦場跡、井上眞改出生地（江戸前期の刀鍛冶）など中世近世の名所旧跡や双石嶽、田野化石渓のような自然景観が紹介される(55)。歴史や古文献にも詳しい若山甲蔵が編集した案内記は、狭い町域だけではなく、行政区域を超えて地域の名所旧跡を眺める視点があった。

大正時代に入ると、『宮崎縣大觀』には、名所として城址などの紹介はあまり見られないが、「日向國史攬要」として治乱興亡の歴史が解説されている(56)。一方三島天眞館の発行した『宮崎名所』は、『宮崎縣案内記』の流れを受け継ぎ、宮崎神宮、高千穂の宮址、大淀川、橘橋、青島などに加えて、宮崎城址と種盛の墓、城ケ崎町、八手濱（飫肥藩の望遠場）、眞改の出生地、田野の化石谷などを紹介している(57)。

昭和二（一九二七）年、県による史蹟調査が行われ、調査報告がまとめられている。この内宮崎市郡の調査報告には宮崎城址、下北代官所などが挙げられているが、宮崎城址は「大字池内上北方の両地に跨れる丘陵の一部を劃せる一大城址なり」(58)とあるように郊外の山城で、元和の廃城以後の記録もなく、また下北代官所は「舊延岡領たる宮崎地方二萬石の支配所なり、大字下北方なる高臺の中央南部にあり、現今原田種雄の所有地に屬し其住宅の外全部畑となる」(59)という状況であり、中世近世の史跡の多くは保存整備された名所旧跡にならなかった。この史蹟調査の数年後、宮崎における遊覧バスが誕生するが、生みの親である、宮崎バス社長岩切章太郎の証言を見ることにしたい。

遊覧バスに乗れば宮崎の名所旧跡は勿論ですが、その他、産業、文化、すべてのことが一通りわかるような原稿にしてみたらどうだろう、言葉をかえていえば、宮崎のダイジェストといったふうの案内文にしたらと考えて原稿を書くことにしました。歴史の方は日高重孝先生がおられましたから、日高重孝先生の所に飛び込んで、何かいい材料はないかといろいろ教えてもらいました。それから県庁やら農事試験場などを回りまして何か日本一というものはないかときいて回りましたら、案外日本一が沢山あるんですね。これはしめたと思って、その日本一という奴をみんな拾い上げて案内文の中に入れました(60)。

〔中略〕宮崎が新しく観光界に乗り出す以上は、宮崎の特徴はこれだというようなものを打ち出さなければならないと一生懸命考えまして、三千年の建国の歴史と南国の情緒で行こうと考えました(61)。

遊覧バスの案内箇所は、専門家への相談と検討の結果、「三千年の建国の歴史と南国の情緒」を宮崎の特徴として選択したものであったが、遊覧バス開始以前に遡ってみると、中世や近世の時代についての資料が、明治時代や大正時代に全く無かったわけではない。中世や近世の名所旧跡の大半が、選択されなかったために文化遺産として価値が低いということではないが、宮崎神宮や青島など、ある程度維持整備された名所に比べて、「史蹟調査報告」に見えるように、ほとんどそのままの状態であった。また県作成の写真帖にも、名所旧跡として写真が掲載されたことは無かった。

岩切は、県外団体観光客の「各地を見て廻るので、眼が肥えていて直ぐ他所と比較すると云う事である。それで他所に無いもの、又は他所よりも勝れたものでないと感心してくれない」という傾向特徴を研究しており(62)、的を絞って「三千年の建国の歴史」である古代、産業・文化といった近代、「南国の情緒」を遊覧ルートに選択したのである。

『日向青島の勝景』

3　風景（名所）絵はがきのパック化の実例

これまでは、大正から昭和にかけての宮崎において、風景（名所）絵はがきが作られる土台を見てきた。

風景（名所）絵はがきには、一ヶ所を扱うスポットか、複数個所を含むパックかという二つの流れがある。この内大正から昭和頃のスポット絵はがきとしては、

宮崎神宮、徴古館、生目神社、青島などがある(63)。先の遊覧バスのパンフに掲載される場所には、八枚一組、十枚一組といったある程度の風物の枚数を確保できれば、スポットの絵はがきが作られる。パック絵はがきとしては、先に泉亭のはがきを製作した植村写真館の例がある(64)。

植村（不散）さんの繪ハガキ「新撰宮崎十勝」が出來ました
獨立軒特製の銘打つてゐますがホントに鮮かなものです
宮崎神宮鵜戸神宮生目神社青島全景青島のビロー樹橘橋霧島
靈峰一ッ葉天神山植物園公會堂と圖書館です。

『都城市及附近風光八景』

大正十五年三月の記事に載った『新撰宮崎十勝』は、写真館の製作するものであるから、ある程度絵になる風景を選択した結果の宮崎十勝が並んでいる。宮崎で遊覧バスが始まる前に作られたものだが、霧島を除いて、ほぼ後の遊覧バスルート上にあることも興味深い。宮崎では大正五年以後、大正九年、昭和五年に県の写真帖が作られるが、宮崎十勝の風景は撮影場所として選ばれている。同時代人の目で、ある程度整備された名所を選ぶと、宮崎十勝のような形に収まるのだろう。これを見ると、人々の中に定番の風景という共通認識が出来あがってきており、中世、近世の名所旧跡がほとんど遊覧ルートに選ばれないのも、定番の風景と一般には認識されていないからという理解ができる。

都城市の例では八景となる。『都城市及附近風光八景』(65)の場合は、昭和七（一九三二）年の『宮崎縣商工人名録』(66)に紹介されている「縣社神柱神社、小松原公園、一萬城、早水神社、縣社母智丘神社」の内、四か所を絵はがきに取り入れ、「早水神社境内の池、一万城遊園地、母智丘神社境内の櫻、關尾の瀧と甌穴、都城市神柱神社と九阜殿、摂護寺山門と釣鐘堂、都城市上町通、歩兵第二十三聯隊前の松並木」の八か所で構成している。

宮崎は先の『新撰宮崎十勝』からさらに風景が増えていき、繪画印刷製では『宮崎十六勝』に至る(67)。一ッ葉、皇宮屋、宮崎神宮、武徳殿、県青年修養道場、高等農林学校、橘通り、県庁、公会堂と図書館、橘橋、生目神社、天神山眺望、青島、青島の枇榔樹、鵜戸神宮、霧島の全十六枚中には、遊覧バスの案内イラストとかぶる

『宮崎十六勝』

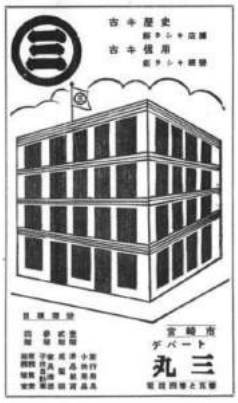
ところが十一枚と多い（傍線）。遊覧のモデルを考えると、「パンフ受領→遊覧バスで実見→下車後絵はがき購入」の順番となるだろう。ここには印刷物の役割分担がある。遊覧前に乗客の想像をふくらますのは、イラストの役目である。パンフの裏にも写真が単色印刷されているが、画像は絵はがきに劣る。遊覧中は現地を見ているのでよいのだが、一般にカメラが普及するまでの絵はがきは、思い出を画像として持ち帰るための役割を担うので、遊覧後に記憶に残る鮮明な画像が、絵はがきには要求される。

鮮明さという点から言えば、和歌山県の大正写真工芸所は、太田宏一氏によると「単に景勝地などの写真があれば売れるというわけではなく、そこには「鮮明さ」がなければならない。この点で工芸所の写真技術は優れていた」(68)という、高い写真印刷技術を持っていた。先の『宮崎十六勝』とは別の会社であるが、大正時代以降大阪、東京、高松、別府などに支店や営業所を開き、各地の絵はがきを製作し(69)、作られた絵はがきは、県庁、高等農林学校、公会堂と図書館、橘通りという同じ場所をいくつか撮影スポットに選んでいる(70)。

大正写真工芸所製作絵はがき

そのうちの一枚は橘通り一丁目の歳末風景で、北から南の方角を撮影しており、画面左が高島屋呉服店、右が神田本店である。この内高島屋呉服店は、広告にあるように三階建ての建築で、食堂を併設しており、宮崎に二つあるデパートの一つであった(71)。このようなデパートがあり、歩道と車道が分けられ舗装された橘通りは、実業の面で近代化が進む宮崎市の象徴であり、見る者に実感させるショーウィンドーとして通過したい場所であった。その街路を走る宮崎バスの車両が、絵はがきには写りこんでいる。この構図は、他県では市街電車が写りこむことが多い。その地方の主要な二次交通機関を、定点通過するときに写し込むのが、市街地の構図における絵はがきの手法、または約束事であったようだ。

昭和七年頃の橘通り（『宮崎名勝』）



高島屋呉服店と丸三デパート広告

維持管理された名所旧跡以外の、近代の建物や街並みについて、それぞれ別の会社が同じ場所を絵はがきにすることは、「舊宮崎町は縣廳設置以來の新開地で、其の以前は田圃であつたさうだが、今は宮崎市繁華の中心になつて居る。就中、橘通りは宮崎銀座ともいふべき近代的の市街だ。」と風景描写されたよ

うに(72)、置県以来変遷を経て、街の顔（ランドマーク）を作り、育てるまでに至ったことになる。大正五年の『宮崎線案内』に収められた、新市街でありながら、低い瓦屋根の街並みで、土の道路を馬車が走るという橘通りの写真と(73)絵はがきとを比べれば、街並みの違いがはっきりする。街の顔とは、その絵はがき(画像)を見たときに、すぐにどの街か見分けがつく場所、街の個性が表れた場所のことである(74)。遊覧バスを例にすれば、情報の送り手(遊覧バス側)と受け手(乗客)に、これらが街の顔であるという共通の認識が成立すれば、絵はがきは街の思い出や印象をくりかえし再生する装置となる。

大正五年当時の橘通り（『宮崎線案内』所収）

絵はがきになった宮崎の風景は、スポット自体が大きく変化しない神社などに比べて、近代の建築物や街並みの変遷が激しい。県庁以外の建物はほとんど壊され、かつての姿は写真や絵はがきの中に残されている。地域の履歴を復元する試みは、出版された『昭和絵巻　橘通から江平町』(75)にもある。東国原知事時代に始まった「県庁見学ツアー」に代表される県庁の観光地化は、新奇な着想というよりも、歴史的に見れば遊覧バス時代に先祖返りして、街の顔の一つとして再生復活させるものであった。

おわりに

絵はがきには歴史資料と画像資料の二つの顔があることがわかった。逓信省発行の絵はがきや県発行の紀念（記念）絵はがきは、周辺史（資）料と連携すれば、皇太子行啓などの歴史的な出来事を読み解くことができる。

個人発行の絵はがきや、名所旧跡の絵はがきは、中間の性質を持ち、画像資料としても貴重だが、歴史資料として発行の背景を考えることで、宮崎における絵はがきの需要や発達、観光分野への貢献といった問題を明らかにできる。当時の人々が何をもって「街の顔」としたかが名所旧跡の絵はがきには表れている。

画像資料としての絵はがきは、失われた風景を残す存在であるが、風景や事象には、写らなかったものもあることに注意したい。これが絵はがきの限界でもある。はじめに言及したように、そのままではいつ作られたかがはっきりしないなど、「いつ、どこで、だれが、なにを」という要素を確定しづらい性格を元来持っている。絵はがきは万能ではなく、それ単独で分かることは少ない。常に周辺史(資)料と連携して読み解く必要はここにある。

註

(1) 「日露役旅順開城」『〔明治神宮外苑聖徳記念絵画館壁画〕』（明治神宮奉賛會、便利堂、大正前期）絵はがきの作成年代は便宜上元号で記載する。

(2) 堀内敬三、井上武士編『日本唱歌集』岩波文庫、二〇一二年、一五四頁

(3) 『日英博覧會紀念』（逓信省、明治四十三年）、『東宮殿下御渡歐記念繪葉書』（大阪毎日新聞社神戸専属販売所、大正九年）、『英國皇太子殿下御来遊記念繪葉書』（朝陽會、大正十一年）、『大東亜戰争記念報國葉書』（逓信省、昭和十八年）。絵はがきデータ詳細は註（5）を参照。

（4）「知的情報としての映像」『博物館の世界』中公新書、一九八〇年、七八頁
（5）島田健造『日本記念絵葉書総図鑑』日本郵趣出版、二〇〇九年
（6）佐藤健二『風景の生産・風景の解放』講談社、一九九四年、二五頁
（7）生田誠『麗しき日本絵葉書　１００の世界』、日本郵趣出版、二〇〇九年
（8）学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』彩流社、二〇一二年
（9）展示図録『絵葉書　そのメディア性と記録性』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、二〇一三年
（10）國學院大學研究開発推進機構学術資料センター『学術資料センター絵葉書資料目録』二〇一四年
（11）『宮崎県史　別編　民俗』宮崎県、一九九九年、九一七、九三一頁
（12）倉真一・長谷川司「「日向青島絵はがき」の成立と変容」『宮崎公立大学人文学部紀要　第十七号第一号』宮崎公立大学、二〇一〇年、同「宮崎の旅路はバスに乗って」『同　第二十一号第一号』宮崎公立大学、二〇一四年。
（13）ケネス・ルオフ、木村剛久訳『紀元二千六百年　消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、二〇一〇年
（14）絵はがきの年代判定については、註（8）（9）（10）などの各文献を参照。
（15）郵政省編『郵政百年のあゆみ』小学館、一九七一年、八五、八六頁
（16）生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、一九七八年、一七〇頁
（17）『日本記念絵葉書総図鑑』
（18）『戦役紀念絵葉書第三回』『同第四回』（逓信省、明治三十八年）。データは註（5）参照。
（19）『郵政百年のあゆみ』、八八頁
（20）樋畑雪湖『日本繪葉書史潮』日本郵券倶楽部、一九三六年（復刻版、岩崎美術社、一九八三年）、一〇〇頁
（21）『日州』明治四十年八月二十八日付広告
（22）『宮崎縣行啓誌』（宮崎縣、一九一二年）八六、八七頁、「繪葉書ノ發行」
（23）「自序に代へて」『日本繪葉書史潮』。樋畑は郵便切手などの研究でも知られ、海外からの旅行者向けの叢書にも、著書が参考書として挙げられている（『JAPANESE　POSTAGE　STAMPS』國際觀光協會、一九四〇年、一四七頁）。
（24）関根正直、加藤貞次郎『改訂有職故實辞典』（村田書店、一九九〇年）「きあかのきぬ」（二一七頁）の項目参照。
（25）原武史『大正天皇』朝日新聞社、二〇〇〇年、一二六頁
（26）『大正天皇』一四七、一四八頁
（27）『東宮殿下大分縣行啓記念』（もとゑ商会、明治四十年）。製造元は東京日本橋区数寄屋町所在。上部に金の鳳凰を配置し、エンボス加工を施す。
（28）若山甲蔵『宮崎縣案内記』一九〇七年
（29）鉄道院『鉄道院線沿道遊覧地案内』鉄道院、一九一〇年、廻遊旅行の栞二頁（山本亮介編『コレクション・モダン都市文化　第６１巻　旅行・鉄道・ホテル』ゆまに書房、二〇一〇年所収）
（30）『宮崎線案内』九州鐵道管理局、一九一六年
（31）『宮崎縣案内』宮崎縣、一九一六年
（32）三島信太郎『宮崎名所』三島天眞館、一九一六年
（33）『宮崎名所』「はしりがきの―はしがき」
（34）『日州』明治四十年十月二十一日付広告
（35）川崎源太郎『日隅薩商工便覧』竜泉堂、一八九〇年、三四丁
（36）『宮崎名所』一一頁。原文でのルビは、「泉亭」（いずみてい）、「紫明館」（しめいくわん）、「水光館」（すいこうくわん）となる。
（37）宮崎商工協會編輯『みやさき』宮崎商工協會假事務所、一九一九年
（38）『日向』三島天眞館、大正七年頃、宮崎神宮櫻馬場
（39）『泉亭』植村写真館、大正六年頃
（40）『宮崎縣大觀』宮崎縣大觀編纂部、一九一五年、一七六頁
（41）『宮崎縣大觀』一七八頁
（42）『みやさき』神田橋旅館、泉亭広告
（43）『宮崎縣寫眞帖』（宮崎縣、一九一六年）「大淀川」
（44）『都城歩兵第六十四聯隊正門ノ景』都城上町海江田書店、大正七年以前

(45) 『小林名所軍馬ノ櫻繪はがき』（土橋寫眞舘、昭和初期）、『小林町名所繪葉書軍馬の櫻』（格〔柊〕山寫眞舘、昭和初期）。県の写真帖では、大正五年に歩兵第六十四連隊、昭和五年に軍馬の桜が紹介される。
(46) 『宮崎縣行啓誌』宮崎縣、一九二二年、二一二頁
(47) 『宮崎縣行啓誌』図版参照。
(48) 鐵道省『鐵道旅行案内』博文館、一九二四年、二〇九頁
(49) 田山花袋『温泉めぐり』岩波文庫、二〇〇七年、三五五頁
(50) 『鐵道旅行案内』二〇九頁
(51) 『名所案内』門司鐵道局運輸課、一九二九年、二〇二頁
(52) 松田法子『絵はがきの別府』左右社、二〇一二年、二八七～二九一頁
(53) 宮崎交通社史編纂委員会『宮崎交通７０年史』宮崎交通株式会社、一九九八年、二四～二八頁
(54) 『宮崎名勝遊覧バス案内』宮崎バス株式會社、一九三三年
(55) 『宮崎縣案内記』九五~一〇二頁
(56) 『宮崎縣大觀』七～一一頁
(57) 『宮崎名所』一～二六頁
(58) 『宮崎縣史蹟調査　第一輯　宮崎市宮崎郡之部』宮崎縣、一九二七年、六頁
(59) 『宮崎縣史蹟調査　第一輯　宮崎市宮崎郡之部』一四頁
(60) 「自然の美　人工の美　人情の美」『自然の美　人工の美　人情の美』鉱脈社、一九八九年、一一八頁
(61) 「自然の美　人工の美　人情の美」『自然の美　人工の美　人情の美』一二一頁
(62) 「的を絞る」『一木一草』講談社、一九八〇年、二四一～二四二頁
(63) 『生目神社』（大正～昭和初期）、『南洋の風土を偲ぶ日向青島の勝景』（昭和初期）
(64) 「植村の繪ハガキ」『蔵六随筆集』宮崎縣政評論社、一九二六年、六一一頁
(65) 『都城市及附近風光八景』前田町西川絵葉書店、昭和八年頃
(66) 『宮崎縣商工人名録』宮崎商工會議所、一九三二年
(67) 『宮崎十六勝』繪画印刷、昭和七年頃
(68) 太田宏一「大正写真工芸所の歴史」『絵葉書　そのメディア性と記録性』二一頁
(69) 「大正写真工芸所の歴史」『絵葉書　そのメディア性と記録性』二〇頁
(70) 『宮崎名勝』大正写真工芸所、昭和七年頃
(71) 『宮崎縣商工人名録』広告。一方の丸三デパートは、旭通一丁目に所在し、熊原呉服店の経営であったが（『宮崎縣商工人名録』一六一頁）、昭和十一年に鹿児島の山形屋呉服店が買収し、同年宮崎支店として開業した（『山形屋二百十七年 - 会社設立五十周年記念 -』山形屋、一九六八年、二四七～二四九頁）。
(72) 國府犀東、大佛次郎、田中純、石井柏亭『神國日向』九州風景協會、一九三四年、一五六頁
(73) 『宮崎線案内』
(74) 宮崎で、テレビの天気カメラや街頭インタビューの冒頭カットに、橘橋周辺や橘通りが使われるのは、映像の送り手と受け手に、これらが街の顔であるという共通の認識が成立しているからである。
(75) 黒木朝子、いちいち会編『昭和絵巻　橘通から江平町』鉱脈社、二〇〇八年

引用文献

赤崎広志・松田清孝・門田真人・山本琢也・田口公則・伊東嘉宏・鬼頭泰司, 2009ａ. 宮崎市柿谷川に分布する後期中新統宮崎層群基底部から産出する熱帯性海洋生物化石群について―特にハシナガソデガイ化石について―. 宮崎県総合博物館研究紀要, 29:57-68

赤崎広志・大迫行義・百原新・松田清孝, 2009ｂ. 宮崎県野尻―四家地域の第四系から産出した種子化石群. 宮崎県総合博物館研究紀要, 29:69-79

赤崎広志・高谷精二・松田清孝, 2010.　宮崎県双石山の砂岩に見られるタフォニの形態について宮崎県総合博物館紀要　30:55-62

赤崎広志・松田清孝, 2011. 宮崎市赤谷に分布する後期中新統宮崎層群から産出した化石群. 宮崎県総合博物館総合調査報告書, 県央地域調査報告書, 147-156

赤崎広志・濱田真理, 2013. 宮崎県有田の後期鮮新統宮崎層群から産出する化石群とコンクリーション. 宮崎県総合博物館研究紀要, 33：105-113

市原季彦・赤崎広志・松田清孝・濱田真理, 2015. 宮崎平野における鬼界アカホヤテフラ降灰直後の津波堆積物. 日本地球惑星科学連合2015年大会津波堆積物セッションポスター発表

門田真人・赤崎広志・松田清孝, 2011.宮崎市高岡山地の後期中新統宮崎層群基底部から産出する熱帯性海洋生物化石群集. 宮崎県総合博物館総合調査報告書, 県央地域調査報告書, 125-146

木野義人・影山邦夫・奥村公男・遠藤秀典・福田理・横山勝三, 1984. 宮崎地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 鹿児島(15), (76),地質調査所, 100p.

松田清孝・赤崎広志・白池図・流田勝夫・市原靖, 2008. 宮崎県内のメガロドン石灰岩分布の拡大について. 宮崎県総合博物館研究紀要 29：81-86

森　浩嗣・Felix G. Marx・甲能道樹・仲谷英夫・赤崎広志, 2015, 宮崎県串間市日南層群から発見された小型の初期新鯨類の上腕骨について, 日本古生物学会2015年年会ポスター発表

長岡信治・西山賢一・井上弦, 2010. 過去200 万年間における宮崎平野の地層形成と陸化プロセス― 海面変化とテクトニクスに関連して―地学雑誌, 東京地学協会, 119：632–667

流田勝夫・赤崎広志・松田清孝・濱田真理, 2013. 宮崎市双石山北西崖面に発達するタフォニ構造の形成に関する仮説. 宮崎県総合博物館研究紀要, 33:103-109

中村羊大・小澤智生・延原尊美, 1999.宮崎県青島地域に分布する上部中新統―下部鮮新統宮崎層群の層序と軟体動物化石群. 地質学雑誌, 日本地質学会, 105：45-60

Oda,M.,Chiyonobu,S.,Torii,M.,Otomo,T.,Morimoto,J.,Satou,Y.,Ishikawa,H.,Ashikawa,M.,Tominaga,O.,2011.Integrated magnetobiochronology of the pliocene-Pleistocene Miyazaki succession,southern Kyushu,southwest Japan:Implications for an Early Pleistocene hiatus and defining the base of the Gelasian(P/Pboundary type section).Journal of Asian Earth Sciences,40:84-97

酒井治孝, 1988, 南九州, 四万十帯南帯の都井岬オリストストロームⅡ. 巨大海底地滑りによる変形構造とその形成過程. 地質学雑誌, 日本地質学会, 94：45-60

下山正一・木下裕子・宮原百々・田中ゆか里・市原季彦・竹村恵二, 1999. 旧汀線高度からみた九州の後期更新世地殻変動様式. 地質学雑誌, 日本地質学会, 105：311-331

首藤次男, 1952. 宮崎層群の地史学的研究. 九州大学理学部研究報告(地質学之部) , 4:1-40

鈴木秀明, 1987. 宮崎層群の層位学的研究, 東北大学理学部地質古生物学教室研究邦文報告, 90:1-24

高橋健一・松倉公憲, 2006, 日南海岸・青島の弥生橋橋脚砂岩塊の窪み深さと日射の関係, 地形, 日本地形学連合, 27:259-281

鳥井真之・尾田太良, 2001. 鹿児島県に分布する伊作火砕流堆積物と宮崎層群に挟在する凝灰岩相との対比-宮崎層群の複合層序にもとずく噴出年代とその意義-. 地質学雑誌, 日本地質学会, 107:379-391

植松　敏・横田修一郎, 2009. 宮崎県南部双石山北西斜面に散在する砂岩ブロック群. 島根大学地球資源環境学研究報告. 28:27-36

氏家恒太郎・大木公彦, 1993. 上部新第三系宮崎層群宮崎相と青島相の層位的・地質構造的関係, 鹿児島大学理学部紀要(地学・生物学), 26:67-84

ている（赤崎ほか 2009b）。諸県層群は、かつて四家層・久木野層とか通山浜層などと呼び分けられていた宮崎層群を不整合で覆う内陸の河成、海成の堆積物を、段丘の項で述べた長岡ら（2010）がテフラを指標に系統的にまとめた呼称である。諸県層群のうち海岸沿いの旧通山浜層からは、しばしば巨大なカキ化石が産出する。寒冷になると巨大化するのは動物の一般的な傾向であり、現在のサロマ湖には大型のカキが生息する。約 32 万年前の加久藤カルデラの活動後、湖になった加久藤盆地には、加久藤層群が堆積した。えびの市池牟礼には、その最も古い地層が堆積しており約 11 万年前のものと考えられる植物の葉などの化石が見つかっている。えびの市小河内や西都市都於郡ではナウマンゾウの臼歯や下顎骨、ニホンムカシジカなどが見つかっている。年代値ははっきりしないが状況証拠から加久藤盆地のものは約 3 万年前のものではないかと考えられている。宮崎の大地に旧石器人が槍を持って現れたのがこの頃と考えられており，加久藤盆地での 3 万年前の狩りの情景を思い浮かべるとなんとも不思議である。このほか宮崎市佐土原町黒田では縄文海進時の内湾に生息したハイガイ、ウミニナ、マテガイ、カキなどが産出している。この一帯の鬼界アカホヤ火山灰層には津波堆積の痕跡が残っていることも判明（市原ほか 2015）している。

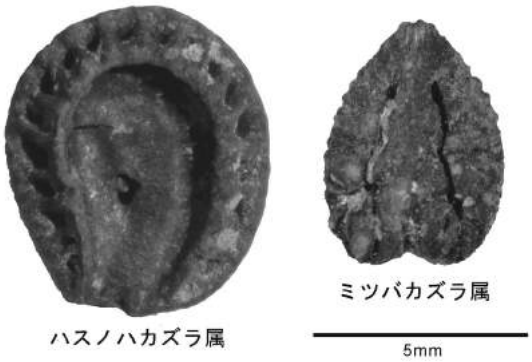


図16　諸県層群の種子化石

おわりに

これまで「絶景」でかたづけられていた各地の景勝地がジオストーリーという付加価値を付けて地域から発信されはじめている。教育研究関係者も自然科学分野のなかで一般市民への浸透が低迷する地球科学に市民権を与えようと参加している。認知されることで保全されるという循環をねらうジオパークは各地で活発化している。大分県、熊本県、鹿児島県は 2 地域を越えるジオパークが活動している。宮崎県の「ジオ」的な独自性を考えると、ジオパーク候補地域はまだあるように思う。地質関係者の一人として、県民が身近な地層や岩石に興味を持ち、活動団体の活性化と底辺の拡大がはかられ、地質講座やジオツアーなどが充実する状況は歓迎したいことである。しかし、ただ待っていてもそのような変革は起こらないであろう。ジオパークに限らず、宮崎の豊かな大自然に接するときに「ジオの視点」をもって、地球のダイナミックな活動と悠久の時間を感じることができる地質学・地球科学のさらなる普及を図っていきたいものである。

e．新第三紀の化石

宮崎層群は化石の宝庫である。約 1000 万年前～ 150 万年前の新生代新第三紀後期中新世～前期更新世という長い時間、約 750 万年の進化がわかる宮崎層群の化石は保存状態が良く、美しい標本も多い。堆積途中の約 260 万年前には新第三紀が終わり、次第に寒冷化する第四紀に入っていく時期であり現在も興味深い研究対象である。青島の波状岩や日南海岸は深海性の堆積物であるため生痕化石が主体であるが、堆積初期の基底部は浅海性で造礁サンゴ、クジラ、サメ、カニ、ウニ、各種貝化石、有孔虫、生痕化石，植物片など多様な化石を産出する。中でも宮崎市高岡町瓜田ダム、淵奥沢（図 15）などは、約 800 万年前の熱帯性サンゴ礁が着床したまま化石として保存されて産出する国内唯一の場所である。ここで産出するサンゴ化石群はノウサンゴ、ナガレハナサンゴ、ショウガサンゴ、カメノコキクメイシ、ミドリイシなどの造礁サンゴ約 50 属種でクサビライシ属やアザミハナガタサンゴ属など沖縄県以南で産出する熱帯性サンゴも含まれている（門田ほか 2011）。また、隣接する宮崎市高岡町柿谷川では国内では産出が少ない希少種の熱帯性巻貝ハシナガソデガイが多産している（赤崎ほか 2009a）。また、宮崎市赤谷では古くからや二枚貝，巻貝などの化石産地として知られていたが 2007 年～ 2010 年にかけて下顎が 1.5m を越えるヒゲクジラ類が産出している（赤崎ほか 2011）。このほか、宮崎市田野町仮屋、鷺瀬、西都市山路、宮崎市佐土原町久峰、新富町日置、川南町通浜、都農町名貫川など各地でフスマガイ、タマキガイ、スダレガイ類、イタヤガイ類、サルボウガイ類、フミガイ類、マツヤマワスレ、キララガイ、オオハネガイ、キヌタアゲマキ、ヌノメアカガイなどの斧足類（二枚貝）、ハシナガソデガイ、ムカシサザエ、オオコシダカサザエ、ルリガイ、ハリナガリンボウ、クマサカガイ、チリメンヒタチオビ、ヤツシロガイ類、ニシキウズ類などの腹足類（巻貝）、センスガイ、クサビサンゴなどの単体サンゴ類、ムカシエンコウガニ、イチョウガニなどの甲殻類、ウルトラブンブク、スカシカシパン、ハスノハカシパンなどのウニ類、メガロドン、アオザメ、メジロザメなどのサメ類、アマダイなどの魚類、クジラ類、アオイガイ、タコブネなどの頭足類、オパキュリナなどの有孔虫類など多種多様な化石が産出している。また宮崎市有田・小内海、日南市鵜戸・贄波、串間市市木などの宮崎層群で見られる生痕化石はズーフィコス　オフィオモルファ　コンドライテス　マカロニクヌスなど漸深海～深海底の様相を呈するものが多い。

図15 宮崎市淵奥沢の着床造礁サンゴ化石

f．第四紀の化石

宮崎層群の堆積が終了した後の約 100 万年前～現在までの第四紀は、新第三紀よりも寒冷化が進み，その中でも気候変動の激しい時期である。小林市野尻町紙屋の諸県層群（四家層）からは、絶滅種や消滅種のヒメブナ、ハスノハカズラ、ミツバカズラ（図 16）など約 40 万年前の種子化石が発見され

散虫化石によって年代が判明している。これらは深海の堆積物であり、恐竜や大型化石の発見は困難そうである。このほか、五ヶ瀬町中登山付近には約1億2500万年前頃の前期白亜紀の堆積物が部分的に分布している。これは黒瀬川帯浅海性堆積物と呼ばれ、海洋プレート上の堆積物が付加するときに大陸側の前弧海盆などで堆積していたもので、付加体の上をカバーするように大陸側から供給されたものと考えられている。これらは浅海性の堆積であり泥岩や砂岩に前期白亜紀のアンモナイトであるシャスティクリオセラス（図13）や、三角貝類のプテロトリゴニア、淡水貝のハヤミナ、シダ植物のクラドフレビスなど恐竜時代の陸や淡水の化石を産出する。群馬県神流町や和歌山県，徳島県など同時代の国内数カ所から同様の組み合わせの化石群と共に恐竜や海棲は虫類など化石が発見されている。おそらく、五ヶ瀬町一帯の地層にも、恐竜類が発見される時を待って眠っていると考えられる。

図13　五ヶ瀬町のアンモナイト化石

d．古第三紀の化石

県内に広く分布している日向層群は四万十累層群の付加体で約5000～3000万年前頃の新生代古第三紀の始新世後期～漸新世前期の年代値が放散虫化石で得られている。前述の厚い砂岩層が滝などの景勝地を形成する地層で大型化石をほとんど産出しない。日向層群の後に堆積する日南層群は四万十累層群最後の地層帯で約3000～2500万年前頃の古第三紀後期漸新世に深海や浅海で堆積した堆積物が大きなブロックで雑然と分布しており、大陸斜面でおきた大規模な海底地滑り堆積物と考えられている（酒井1988）。日南層群はブロックごとにやや様相の異なる化石群を産出する。日南市猪崎鼻では、不思議な網目模様を呈するパレオディクティオン、渦巻き状や繰り返しの線構造を呈するスピロラァーフェ、ヘルミントラーフェ、ブンブクウニ類の這い跡とされるスコリシア（図14）など研究者の評価が世界的ともいえる生痕化石群が多産する。串間市都井岬や毛久保では、ヒトデの休憩痕や海底面に残った漣状の微地形が保存された漣痕、二枚貝化石、ロッセリアなどの生痕化石が見つかっている。串間市高松では2013年に原始ヒゲクジラ類化石が発見され2015年6月の日本古生物学会で報告（森ほか2015）された。

図14　生痕化石　スコリシア

を産出するが、それを取り巻く泥質岩やチャートがジュラ紀の堆積であることがわかったのも化石資料による情報からである。かつてチャートや泥質岩からは貝などの大型化石が産出せず、時代不詳でありペルム紀の石灰岩を含むことが唯一の時代情報であった。1970 年代に岩石から 1㎜程度の放散虫化石を取り出す技術が確立し、電子顕微鏡を使ってその形態分類ができるようになると各地で新知見が続出し，1980 年代は放散虫革命ともいえる時期であった。放散虫は珪酸質の殻（図 11）をもつ海洋原生動物で、炭酸塩が溶けてしまう炭酸塩補償深度（CCD：約 4000 ～ 5000 m）を超えた深海底でも珪酸質の殻が溶けずに堆積するため、ほかに化石のいない深海底の泥質岩やチャートから産出する。世界中の海に今でも生息し、進化速度が速いため，多数の標本を時間軸で並べることにより良好な示準化石になった。宮崎県の付加体は深海で付加したものであるから、取り込まれた石灰岩ブロックを取り巻く泥質岩などから別の時代の放散虫化石が検出されたことは、当時議論の分かれていたプレートテクトニクス理論や付加体地質などを後押しすることになったのである。

b．三畳紀～ジュラ紀の化石

県内で最も分布域が広く、熊本県、大分県にも連続する帯状の石灰岩地帯は秩父帯三宝山帯に属する。ここも付加体であり、約 1 億 6000 万年前のジュラ紀のチャートや約 2 億 3000 万年前の三畳紀の石灰岩ブロックを取り巻く基質の泥質岩は約 1 億年前の前期白亜紀の放散虫化石を産出する。三畳紀の石灰岩は椎葉村時雨岳、諸塚村黒岳、高千穂町向山、日之影町戸川岳、洞岳などに分布する。このすべての場所で厚歯二枚貝類メガロドン（図 12）が見つかっている。この化石は一見石灰岩の模様のように見える。大型貝類の断面をさまざまな方向から眺めているもので、熊本県では 1981 年に球磨川沿いの球泉洞付近で発見され県の天然記念物に指定されている。宮崎県では 1996 年に椎葉、2001 年に高千穂、その後、続々と発見され現在では三宝山帯の石灰岩ではメガロドンが見つかることが一般的になっている（松田ほか 2008）。このほか、三畳紀の化石として五ヶ瀬町笠部の泥岩からモノチスという絶滅二枚貝が発見されている。

図12　洞岳のメガロドン石灰岩

c．白亜紀の化石

ジュラ紀から白亜紀といえば、世界中で恐竜類の大繁栄した時代である。国内はもとより九州でも福岡、長崎、熊本、鹿児島で恐竜や首長竜など海棲は虫類の化石が見つかっている。宮崎県の中生代の地層としては、おもに三宝山帯などの約 1 億 5000 万年前のジュラ紀から約 1 億年前の白亜紀の付加体と諸塚層群の約 1 億 3000 万年前～約 7000 万年前の前期～後期白亜紀の付加体が県北部に広く分布している。これらは深海底にたまった泥岩や砂岩であり、わずかに生痕化石などが産出するほかは、放

4）太古の生命が語る宮崎の歴史

地球誕生は約 46 億年前、生命誕生は諸説あるが約 40 億年前、日本最古の地層は約 5 億年前などとされている。宮崎県では顕生代 5 億年のうち、多くの時代の化石が見つかっている。化石は太古の地球環境について雄弁に語ってくれる地質分野のスターである。老若男女が興味深く観察し、かつて生きていた生物に思いをはせる。これが外国の標本ではなく郷土宮崎で見つかった資料ならば、まさに「ジオストーリー」を語る恰好の素材である。

a．古生代の化石

宮崎県最古の化石は五ヶ瀬町鞍岡の祇園山に分布する石灰岩から見つかる。これらは古生代シルル紀～デボン紀の約 4 億 3000 万年前頃の床板サンゴ類、四放サンゴ類、三葉虫、ウミユリなどである。床板サンゴ類と四放サンゴ類、三葉虫はいずれも古生代で絶滅した生物群で、ウミユリは現在では深海にのみ生きる生きた化石といわれる生物である。床板サンゴ類は水平方向の隔壁（床板）が発達するが内部の隔壁が少なく、四放サンゴ類は内部の隔壁が 4 またはその倍数であり、現生の八放サンゴや六放サンゴとは構造が異なっている。群体の横断面が鎖状になるクサリサンゴ類（図 10）や，密集する群体がハチの巣ようにみえるハチノスサンゴ類、大きな個体の周囲を小さな個体が取り巻く日石サンゴ類など多数の種類が発見されており、日本では北上山地、高知県横倉山などと並ぶ貴重な産地である。標本は宮崎県総合博物館、五ヶ瀬町自然の恵み資料館、県庁本館などに展示されている。

図10　クサリサンゴ（クラオケンシス）

ペルム紀の化石は五ヶ瀬町の白岩山、高千穂町皿糸などの石灰岩から産出している。これは秩父帯北部の黒瀬川帯にある約 1 億 6000 万年前のジュラ紀付加体の中に約 2 億 5000 万年前のペルム紀の石灰岩が巨大なブロックとして取り込まれているものである。産出する化石はフズリナという米粒大の紡錘形をした石灰質の殻をもつ海洋原生動物の有孔虫が特徴的で二枚貝化石も見つかっている。五ヶ瀬町白岩山では巻貝、二枚貝など、岐阜県の有名な化石産地である金生山と類似する化石が多数産出している。石灰岩からはペルム紀化石

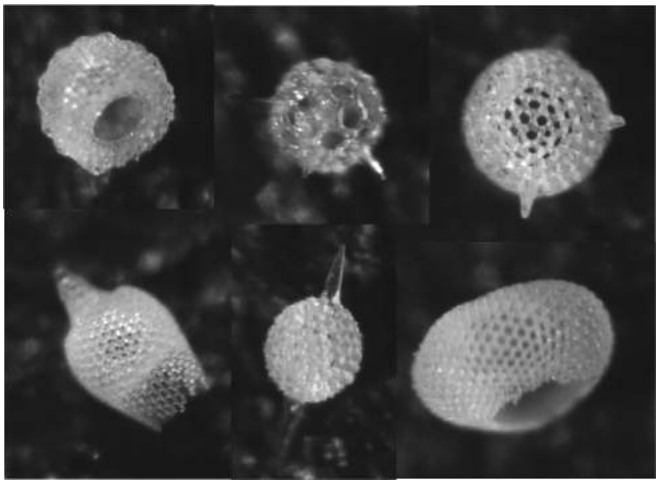


図11　放散虫の殻

市塩鶴の双石山北西側の中腹にある針ノ耳神社一帯に広がっている（図 9）。ここでは巨岩が宮崎層群の厚い砂岩層から「トップリング」と呼ばれる崩落形態（植松ほか 2009）で分離して狭い岩の隙間を形成している。この岩の隙間の中や巨岩の表面にタフォニ地形が密集し、独特の雰囲気を持つ景観となっている。双石山北壁では、タフォニ形成の要素と考えられていた海水と直射日光という要素が除外される。この場所のタフォニ地形の形態を詳細に観察したところ地下水流なども供給される要素がない。双石山では、砂岩表面に析出した白色物質を分析したところ硫酸マグネシウムが結晶化していた（赤崎ほか 2010）。つまりここでも、塩類風化によるタフォニ地形が形成されていることはほぼ間違いない。ノッチやハニカムといった特異な形態を形成することへの仮説として、筆者らは岩の隙間に吹き込む風の力が作用しているのではないかと考えている（流田ほか 2013）。

3）地球からの贈り物　人と大地の関わり

ふるさとの大地を構成する岩石や鉱物は太古から現在に至るまで人間と大きな関わりを持ってきた。旧石器時代の石器の素材として有名な黒曜石の大産地である北海道遠軽町白滝にある白滝ジオパークのキャッチコピーは「地球科学と人類史の融合」である。宮崎でも石を素材にした道具は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の各遺跡から出土している。旧石器時代の石器石材として祖母・傾山カルデラ周辺に分布する無斑晶流紋岩やデイサイト質溶結凝灰岩などが広い範囲に流通している。その後も狩猟・切削・農耕などへの石器の使用、祭祀・装飾のための石材の使用など、岩石は古代人の生活になくてはならないものであり、岩石の性質を見分け、利用する能力は現代人よりも優れていたようである。その後の時代も、石臼・石塔・墓標・石碑の製作、装飾・宝飾のための岩石の使用などは現在にもつながっている。これらの考古資料は宮崎県総合博物館、宮崎県埋蔵文化財センター分館、西都原考古博物館や各地の資料館などに展示されている。石を使った建築・構造物も人々の生活に身近である。古墳時代には古墳表面を礫で覆い、中世・近世には城郭・石垣が建造された。都城市の観音瀬水路など治水工事と石材採掘を兼ねた構造物もある。近代・現代には石橋や堰堤など石造構造物は多数つくられている。かつて石材として流通した五ヶ瀬祇園山の石灰岩は県庁本館の中央階段を飾っており、現在でも見立礫岩や尾鈴山溶結凝灰岩は岩盤浴や建築石材に利用されている。岩石・鉱物の素材としての活用法に鉱業・窯業の原材料がある。近世から昭和 30 年代まで、県北部を中心にたくさんの鉱山が稼働した。高千穂町では土呂久鉱山（各種金属鉱物、砒酸鉱物、スカルン鉱物）、秋元鉱山（菱マンガン鉱、バラ輝石）、日之影町では、見立鉱山（含錫褐鉄鉱）、音ヶ淵鉱山（灰重石・タングステン）、高千穂珪石鉱山（石英、長石）、延岡市・日之影町では槙峰鉱山（含銅硫化鉄鉱）、木城町では松尾鉱山（硫砒鉄鉱、鉄閃亜鉛鉱）、西米良村では天包・小川・広瀬鉱山（輝安鉱）、都城市では四家鉱山（輝安鉱）などが知られている。また、現在でも宮崎市の宮崎層群からヨウ素や天然ガスの採掘が行われていることはあまり知られていない。

現代では科学情報を集めるために地質調査や岩石分析を行うことは一般的である。火山や地震、土砂災害といった生活に直結する事象から、地球科学的な基礎研究のため深海底調査や地底掘削をしたり月・惑星探査での岩石採集・分析といった領域まで、人間と大地の関係は広がっている。

年の研究者の間では一般的なようである。宮崎層群のコンクリーションはさまざまな大きさがある。直径 10cm 程度のボールから直径 100cm に達するもの、形は球形から楕円体が最も多いが不定形やねじれた板状になったものなどもある。おおむね北部で小さく、南部で大きい傾向がある。これらは大変硬いため、川や海で浸食されると周囲の砂岩が先に削られる差別浸食がおこり、まるで岩盤からたくさんのキノコがはえてきたような形状になる。現在確認されている地点は北から都農町名貫川（約 150 万年前）、新富町日置（約 250 万年前）、宮崎市有田・糸原（約 500 万年前：図 8）、宮崎市高岡町柿谷川（約 700 万年前）、宮崎市青島（約 650 万年前）、日南市鶯巣、鍋崎（旧潮小前海岸）、富土観音礁・瀬平崎（旧サボテンハーブ園下海岸）、牧場（サンメッセ日南下海岸）、鵜戸神宮（約 800 万年前）、大島（約 1000 万年前）など宮崎層群全域にわたっている。これらのコンクリーションとその共産化石、蛍光 X 線分析、X 線回折の結果などは宮崎県総合博物館の研究紀要で報告している（赤崎ほか 2013 など）。岩石の成分分析をしてみると砂岩を硬く膠着させているのは、ほとんどの地点で炭酸塩成分で、多くが炭酸カルシウムを主体とする方解石（カルサイト）であった。新富町日置だけが方解石にマグネシウムを含有する苦灰石（ドロマイト）であり近隣の冷湧水化石群集などとの関連も考えられる。形成メカニズムは詳しく研究されておらず、科学的な濃集だと一般的に考えられているにとどまっている。今後の課題である。

d．塩類風化（タフォニ地形）

海岸の砂岩表面にハチノスのような風化と岩のくぼみを見かけることがある。これまで考えられていたハチノス状の風化ができる理由は①カモメガイやニオガイなどの穿孔貝のあけた穴によるもの、②鉄分が網目状に集まってかたくなり弱い部分が風化してくぼんだもの、③海水などの塩分が日光に当たって乾燥し、結晶を作るときに砂岩の砂粒のつながりを切ってしまう塩類風化によるものなどが考えられてきた。塩類風化とは、岩石の表面から水分が蒸発するときに塩類の結晶が成長し、鉱物のつながりを切っていく現象である。近年は、これらの風化の主原因は塩類風化によるとする考え方が一般的となっている。青島弥生橋の橋脚は大正 9 年（1920 年）、鵜戸神宮駐車場下の高松宮殿下訪問記念碑は昭和 6 年（1931）9 月の建設である。いずれも宮崎層群の砂岩でできているがいずれも塩類風化が進んでおり、80 ～ 90 年ほどで、どの程度の塩類風化が進行するか把握できる興味深いサンプルである。海岸部でよく見られる浸食地形であり、海水や日射によるとする研究（高橋ほか 2006）もある。ハチノス状の風化が見られる場所には、ノッチとよばれる岩盤のくぼみ地形ができることが多く、これらを総称してタフォニ地形と呼ぶ。タフォニ地形としては国内最大級の大露頭が宮崎

図9　双石山のタフォニ地形

地形なので中に入ってしまうと体感しにくいが、遠望することができれば興味深い地形である。蜂の巣公園は花立山の展望台からその不思議な景観を観察できる。

c．岩石の差別浸食がつくりだすオブジェ

（1）　海にダイブする鬼のすべり台（ケスタ）

日南海岸の国道 220 号線をドライブすると、海岸に広がる鬼の洗濯岩と共に特徴的な地形が目を引く。厚さ 10m を越える厚い砂岩層が海に向かってスロープを造り、まるで巨大なすべり台のようなふしぎな景観である。これは、地形用語でケスタ地形とよばれ、スペイン語で「斜面」を意味している。半島と入り江を繰り返す 220 号を移動しているとケスタが複数あるように錯覚するが、旧サボテンハーブ園（富土の観音礁・瀬平崎）（図 7）、サンメッセ日南（宮浦牧場）、鵜戸神宮などが同一の厚い砂岩層で構成されている。また、宮崎層群の基底部にある厚い砂岩層は北は双石山から南の大島、七つ岩にかけてケスタ地形を形成している。双石山のケスタ地形は宮崎市の大淀河畔からも見ることができる。前項で述べた鬼の洗濯岩は 1 m以下の砂岩層を繰り返す砂岩泥岩互層が波食されたものであるが、ケスタを構成する厚層理砂岩層も傾斜はそれらと同じである。厚いため浪の浸食を免れ、隆起を続けた差別浸食地形である。

図7　富土のケスタ地形

（2）　キノコ岩（コンクリーション）

宮崎層群の砂岩層にはコンクリーションと呼ばれる硬い岩塊がしばしば含まれている。これらは、かつてノジュール（団塊）とも呼ばれていた。コンクリーションとノジュールはおおむね同義語で厳密な区分はないようであるが、深海底のマンガンノジュールなどは泥質な基質の中に異なる物質が濃集しているもので、宮崎層群などのコンクリーションは周囲の砂岩と同じ粒子の砂が硬く膠着している。つまり、均質な岩石の一部が膠着しているものをコンクリーション、異質な物質が濃集するものをノジュールと呼び分けるのが近

図8　宮崎市有田のコンクリーション

社は、厚い砂岩層の上面をトラバースするように北に移動し岩盤の縁を海面に向かって降りた場所にある。まさに波打ち際の社であり、高波の時は危険である。ここは現在進行形の海食洞であるが、天井を形成している砂岩層が崩落し堤防や消波ブロックの役割を担っており、常時浸食を受けているわけではない。鵜戸半島は約 1000 万年前の厚い砂岩層の下にできた海食洞で 7000 年の気候変動と大地の動きを体感できる場所である。このほか鵜戸神宮周辺には前項の「鵜戸の千畳敷」波状岩、後述するコンクリーションとそれに伴う石灰成分の析出でできた鍾乳石など「ジオ」の視点で観察できる多数の露頭がある。

b．水流と堆積岩がつくる絶景

堆積岩地帯の滝や渓谷は、火砕流堆積物がつくる滝や渓谷とは、趣の異なる美しい景観をつくりだしてくれる。堆積岩系の有名な景勝地のうち、多くの場所に地質学的な共通点がある。そのポイントとなるのが「厚い砂岩層」と「砂岩泥岩互層」である。前述の波状岩や海食洞が、これらのつくる海岸の絶景とすれば、これらのつくる内陸の絶景も興味深い。宮崎県の内陸部では四万十累層群日向層群北部の付加体に厚い砂岩層を含む砂岩優勢互層が分布している。この砂岩優勢層は成層砂岩とか珍神山層とも呼称される層準で約 5000 ～ 3000 万年前に海溝で堆積した地層である。北は延岡市の愛宕山付近から仁久志山、珍神山、竜房山と尾鈴山の北を斜めに通過し烏帽子山を経て西米良の市房山の南に抜ける地層帯である。まさに宮崎県がたすきをかけているように連続して分布する。この地層帯の中には砂岩の優勢な砂岩泥岩互層にかかる滝として西米良村の布水の滝、木城町の祇園滝、日向市東郷町の観音滝などがある。この層準の硬い砂岩層は付加に伴って褶曲し、さまざまな傾きで露出している。そのため、滝の地層が順層（流れ盤）、逆層（受け盤）、水平層のいずれかによって様相が変化する。滝のほかにも砂岩優勢互層が美しい造形をつくる美郷町北郷区の舟方轟、延岡城の石垣の石材を産出した延岡市の愛宕山など興味深い場所が点在する。

前項で宮崎層群の海岸部における砂岩泥岩互層と厚層理砂岩による波状岩と海食洞を紹介した。ここでは内陸に分布する宮崎層群が形成する河川の造形を紹介する。宮崎市の双石山と加江田渓谷、日南市の猪八重渓谷と蜂の巣公園の２地点である。地質図を見ると両地点が類似した地質の場所に立地することがわかる。これらは宮崎層群の基底部近くにあたり約 1000 ～ 700 万年前に海に堆積した地層である。この砂岩優勢互層は猪八重渓谷では砂岩泥岩互層にかかる美しい滝群をつくる。ここでは南東向きに単斜構造の宮崎層群中を渓谷が複雑に向きを変えつつ左岸右岸と橋を渡って進むため、地層を立体的に観察できる。流合の滝、岩壺滝、五重の滝などは南から南東に傾斜する砂岩泥岩互層をさまざまな角度から観察している。同じ地層ながら眺める角度と滝の形成する向きが変化し見比べると興味深い。

このほか、硬い砂岩地帯を川が流下する場所にできる地形に馬蹄形の谷がある。ギリシャ文字の大文字のオメガ（Ω）にも似た形の渓谷であり、世界的にはアメリカアリゾナ州のコロラド川に見られるホースシューベンドなどが有名であるが、宮崎層群では日南市北郷の蜂の巣公園、四万十累層群では西都市の瓢箪淵などで見ることができる。これも厚い砂岩層を河川が通過するときにできる造形である。大

①混濁流などにより宮崎層群の砂岩泥岩互層が海底に堆積（約 1000 万年前～約 150 万年前）
②陸側の隆起と宮崎層群の東傾斜の傾動（約 30 万年前から）
③最終氷期まで繰り返された海退による谷地形・半島状地形の形成（約 2 万年前まで）
④縄文海進による谷地形の水没との沖積層の堆積、その後の海退（約 7000 年前）
⑤海食台上での砂岩と泥岩の差別浸食（現在進行中）

②～⑤にわたって隆起を継続しつつ海進と海退を繰り返し、現在も潮間帯にあるという隆起と海進海退の絶妙なバランスがつくりだしている景観である。少しでもバランスが乱れれば海中に没するか陸化するのである。近年、問題視される温暖化で海進が進むのか、現在進行形の隆起と絶妙なバランスをとり続けるのか。大地の動きと気候変動とのバランスは興味深い。

（3）　神々の住まい：海食洞

鵜戸神宮の観光客来訪者数は高千穂峡についで宮崎県内第 2 位である。神話にまつわる話題や洞窟の中に鎮座する本殿の神秘的な雰囲気は他にない観光スポットである。鵜戸神宮が他の社寺と一線を画し、来訪者の心に強く残る理由の一つに当地の圧倒的な奇岩群と断崖、そして洞穴のダイナミックな景観があげられると思う。このふしぎな景観が、どれほどの時間と大地の動きでつくられたかを解説することは、興味深いジオストーリーではないだろうか。海食洞の成因は砂岩の厚さにポイントがある。日南海岸の宮崎層群は厚さ 1m 以下の砂岩と泥岩がリズミカルに繰り返す砂岩泥岩互層が波状岩を形成している。この薄い砂岩泥岩互層に洞穴ができても天井の砂岩層が次々に崩落し危険である。日南海岸全域をみても海食洞は多くない。日南海岸一帯の宮崎層群には群を抜いて厚い砂岩層が 2 枚存在する。その 1 枚が鵜戸神宮本殿のある洞穴の天井を構成している。その厚さは約 18m であり、波が容易に浸食することができず、砂岩層の下側の泥岩優勢な互層がもろく削れやすいために波食され、厚い砂岩層が天井となった海食洞ができたのである。また、鵜戸神宮の所在する半島の北側の波打ち際にはもう一つ、洞穴内の神社「波切神社」（図 6）がある。この 2 つの神社でジオツアーを行うと 2 つの洞穴の共通点と相違点が解説できる。両神社の鎮座する洞穴は宮崎層群を波がうがった海食洞である。大きな相違点はその標高である。鵜戸神宮は、波打ち際より約 7 ～ 8m ほど高い位置にあり、通常では波浪が岩を削る場所ではない。この場所を波が削るためには海面が上昇するか、地盤が沈降する必要がある。約 7000 年前の縄文海進（MIS1）が最も現在に近い海進である。このとき海面は 5 ～ 6m ほど上昇したと考えられている。1000 年で 0.5m の隆起があれば 7000 年で 3.5m の地盤上昇となる。鵜戸神宮は縄文海進時の海食洞内に建立されているのである。一方、波切神

図6　波切神社の海食洞

つくり出した。これが段丘である。「ジオ」の視点で重要なものに時間軸の視点がある。地形や地層が形成するためにかかった時間とその間の変動を感じる視点である。宮崎平野一帯は約 35 万年前から隆起を始めたようで、下山ほか（1999）による過去 13 万年の隆起状況の研究では、宮崎平野の南東部で 1000 年に約 1m、北部で 1000 年に約 0.5m のペースで隆起している。また、過去 35 万年の間に地球の気候は温暖化と寒冷化を繰り返している。気候変動については海底ボーリングコアの有孔虫化石が保存していた酸素同位体比の調査などで詳細が解明されている。それによると、かつて「氷河期」としてギュンツ、ミンデル、リス、ウルムなどと分類された気候変動はさらに複雑で、約 260 万年前の第四紀のはじめから現在までに 100 以上の寒冷化と温暖化を繰り返していることがわかった。近年は、寒暖期の数が多く名称が付けにくいため、温暖期を奇数、寒冷期を偶数で表現した海洋酸素同位体ステージ（MIS: Marine oxygen Isotope Stage）で表現されている（図 5）。宮崎平野の段丘は、大きく分類すると約 24 万年前の温暖期と寒冷期（MIS8 ～ 7）による海進海退によって形成した茶臼原などの高位段丘、約 14 万年前から 8 万年前までに数回繰り返された温暖期と寒冷期（MIS6 ～ 5e-a）に三財原、新田原、唐瀬原、西都原といった中位段丘が順次形成した。その後、約 7 万年前からの最終氷期（MIS4 ～ 2）には清水、大淀、深年といった河川成の低位段丘が形成している。約 7000 年前の縄文海進期（MIS1）から現在までに佐土原一帯や日南海岸の海岸部は隆起と海退による 4 面の段丘面を形成しており、これらは宮崎平野では下田島Ⅰ～Ⅳ面と呼ばれている。それぞれテフラ、C 14 年代測定、考古遺物などからⅠ面が約 6000 ～ 5000 年前までに離水して陸地化し、II 面が 5000 ～ 4800 年前、III 面が約 3000 年前、IV 面が約 1600 年前の離水と考えられている。

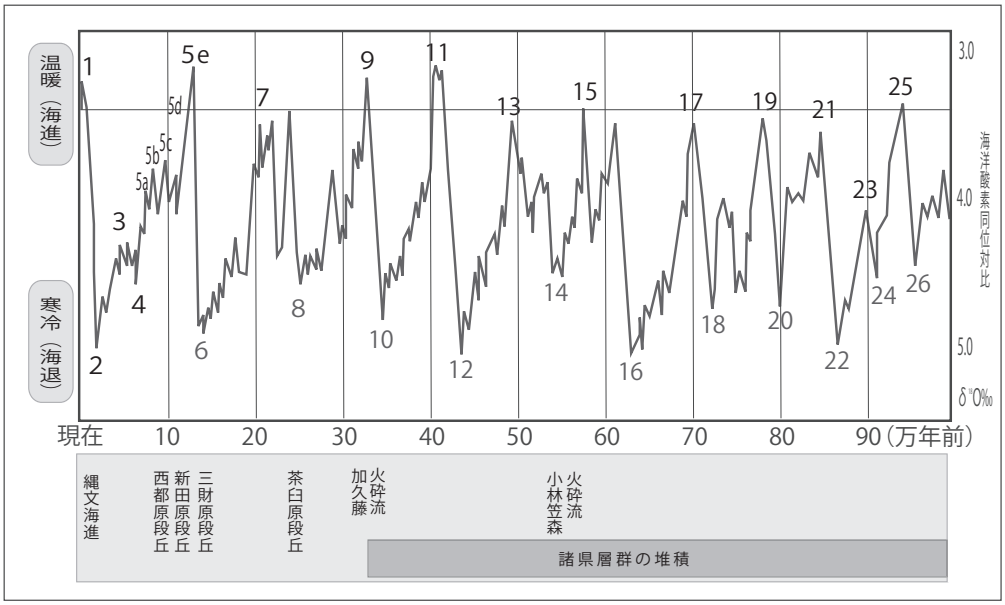


図5　過去100万年の気候変動と宮崎の段丘

（2）　鬼の洗濯岩：波状岩

日南海岸の「鬼の洗濯板」は観光宮崎のシンボルである。地質や地形の分野では波状岩や洗濯岩と呼称している。青島周辺や、戸崎鼻一帯まで「青島の隆起海床と奇形波蝕痕」として国の天然記念物に指定されている。また鵜戸半島南岸の「鵜戸の千畳敷」は県指定天然記念物である。波状岩の成因は細かい点では研究者の見解が異なるが一般的には、以下の①～⑤の様なシナリオである。

に加久藤カルデラが活動している。隣接したカルデラから、類似する凹地状地形の方向に噴出したため小林火砕流は多くの場所で加久藤火砕流など上位の火砕流に覆われている。そのため景勝地を形成しているのは、ほとんどが加久藤火砕流堆積物である。小林市須木の須木の滝（ままこ滝）、猫坂・奈佐木の奇岩、東方の三ノ宮峡と陰陽石、都城市庄内の関之尾滝と甌穴群などが加久藤火砕流堆積物で構成されている。これらはすべて霧島ジオパークのジオサイトとして整備・活用されている。

県南から宮崎市にかけては、鹿児島県の錦江湾北部に位置する姶良カルデラから約２万 8000 年前に噴出した入戸火砕流堆積物に広く覆われている。入戸火砕流堆積物の溶結凝灰岩は「灰石」などと呼ばれ三股町の長田峡、串間市の赤池渓谷、日南市の小布瀬の滝などをつくっており、非溶結部はシラスとよばれ広域なシラス台地や都城盆地の河岸段丘などを形成している。このとき上空高く噴き上げられた姶良 Tn 火山灰は広く大陸や北日本にも降灰し、考古遺跡の発掘調査での指標テフラに活用されている。同様に約 7300 年前に種子島西方の薩摩硫黄島・竹島から噴出した鬼界アカホヤ火山灰も、宮崎県内で明瞭に確認できる縄文時代早期と前期を分ける指標テフラである。鬼界アカホヤテフラは、火砕流堆積物が宮崎県内に到達していないため目立った地形的な景観を形成してはいない。鬼界カルデラは 2015 年９月に日本ジオパークに認定されている。

d．活動する火山・霧島の景色

霧島火山群は、加久藤カルデラの南縁に約 30 万年前から現在まで継続して活動しており、大小 20 あまりのさまざまなスタイルの火山が集まった集まった複合火山である。2010 年９月に日本ジオパークに認定され、ジオツアーや案内看板、パンフレットなども充実している。霧島ジオパークの公式ホームページでは、姶良カルデラ・桜島・開聞岳などの南海トラフと平行に連なる火山フロントを見ることができ、プレートの沈み込み帯での火山のなりたちを直接目で見て、学ぶことができる視点や、山体の割に直径の大きな火口と火口湖の存在を豊富な降水量と水蒸気爆発に関連させて解説する視点、高千穂峰のような鋭角的なシルエットを持った成層火山、韓国岳のような火砕丘など、噴火の形態や溶岩の性質によって多様な火山地形ができたという視点など「霧島ならでは」のストーリーを展開している。霧島火山群は今なお活発に活動しており 2011 年１月 27 日の新燃岳の爆発的噴火に続いて、2014 年 10 月 24 日～ 2015 年５月１日まで硫黄山の火口周辺警報に伴って周辺１ｋｍの立ち入り規制などが実施されている。

２）堆積岩の風化浸食がつくる悠久のアート

a．気候と地殻変動の絶妙なバランス

（1）　宮崎独特の「原（ばる）」：段丘地形

宮崎平野北西部には「○○原（ばる）」と呼ばれる多くの段丘地形が分布している。宮崎平野の段丘地形は長岡ほか（2010）により詳細な研究としてまとめられている。温暖期には海水準が上がり、海岸線が内陸に入り込む「海進」がおこる。寒冷期には海水準が下がり海岸線が沖合に出て行く「海退」がおこる。この海進海退と大地の隆起の複合によって、海底や扇状地がつくる平坦面が階段状の地形を

祖母山、傾山、大崩山はいずれもカルデラ陥没地形の地上部分が浸食により削剥された「元カルデラ」でありコールドロンと呼ばれている。祖母山、傾山コールドロンでは、流紋岩 - 安山岩質の火砕流や溶岩流をたびたび噴出し堆積している。五ヶ瀬川流域や大分の大野川流域では、これらの珪長質な火山岩を使用した旧石器時代の石器が多数発掘されている。大崩山コールドロンの周辺には陥没に伴って形成した環状岩脈が分布している。尾鈴山は日向市細島沖にあったとされる火口から噴出した火砕流堆積物の山体が太平洋側に傾動して東半分が海中に没している。日向岬、馬ヶ背などはこの火砕流堆積物の溶結凝灰岩がつくる柱状節理の景勝地であり、隣接するクルスの海や権現崎は、柱状節理の間に直行して分布する大規模で直線的は節理が垂直な谷地形を形成している。現在の尾鈴山山頂はかつての山体の西側に位置しており、瀑布群を形成する矢研谷、欅谷なども同様の直線的な谷地形である。大崩山と市房山はいずれも、かつて地下深くにあったマグマだまりがゆっくりと冷えて固まった花崗岩を主体としている。大崩山や周辺の鉾岳、鹿川渓谷、見立渓谷などで見られる花崗岩は、長い時間をかけての上位の地層が削剥され地上に露出したもので、マグマだまりの化石ともいえるものである。

c．巨大火砕流がつくった絶景

中南部九州は巨大カルデラの集中地域である。コールドロン化した中新世のカルデラとは異なり、第四紀に活動したカルデラは、その陥没地形をとどめている。また噴出した火砕流堆積物は広域に分布し、柱状節理の卓越した渓谷や滝を多数形成し、埋め尽くした平原が河川により開削され火砕流台地や火砕流の河岸段丘を形成した。これらの多くが独特の景観をつくりだし景勝地となっている。火砕流堆積物のつくりだす景観が見られる場所での地質解説には、冷却による柱状節理やエンタブラチャーの形成過程、その後の浸食による谷地形や甌穴の形成などに加え、巨大カルデラの分布などの話題を提供できる。また、起源を同じくする火山活動でできた景観が、各地の固有の条件で削り出され趣の異なる独特の景観をつくっていることに注目するという視点も、大地の造形を広域に捉える「ジオ」の視点である。

図4　高千穂峡の阿蘇3柱状節理

県北の五ヶ瀬川流域などでは阿蘇カルデラから供給された巨大火砕流の堆積物が分布しており、黒色のガラス質レンズをはさむ特徴的な溶結凝灰岩が美しい柱状節理を見せている。阿蘇カルデラは過去 4 回大規模化火砕流を噴出しているが、そのうち 3 回目にあたる約 13 万年前の阿蘇 3 火砕流と 4 回目にあたる約 9 万年前の阿蘇 4 火砕流の堆積物が谷を埋めるように厚く分布している。阿蘇火砕流堆積物は五ヶ瀬町のうのこの滝、高千穂町の高千穂峡（図 4）、尾橋渓谷、日之影町の八戸観音滝や八戸集落の河岸段丘など多くの場所で見ることができる。県西では約 53 万年前に小林カルデラ、約 34 万年前

が火山をテーマにしたジオパークである。火山関連の地域では活火山・温泉・溶岩流・火砕流・柱状節理・溶結凝灰岩・カルデラと話題豊富である。

ひとくちに火山関連の地質といっても噴出時期の相違や活動形態で観察できる景観は大きく変化する。宮崎県内の火山や火山岩の形成時期はおおまかに4グループに分類できる。

a．日本列島誕生以前の火山の痕跡

最も古い火成岩は五ヶ瀬町の鞍岡火成岩類である。K-Ar 法で約 4 億 5000 万年前の値があり、九州最古の岩体となる。これは、大陸由来の花崗岩ではないかと考えられている。付加体に取り込まれた火山岩としては、一般に緑色岩類と呼ばれる玄武岩質火山岩類がある。この岩体は海洋の深海底で活動した海底火山の噴出物で、その溶岩流は海水で急冷されて枕を積み重ねたような形状になった枕状溶岩を形成する。これらはプレートの運動で海溝に沈み込み、付加体として地中に取り込まれた。その後、地殻変動や浸食によって現在の場所に露出した。枕状溶岩は「付加」を悠久の時間の流れの中でおこるダイナミックな変動としての解説するのに好適な素材である。県内の枕状溶岩は小丸川の上流の美郷町南郷区と椎葉村の村境である鬼神野・栂尾地区の渓谷にある鬼神野・栂尾溶岩渓谷が代表例である。ここは、緑と赤が美しい枕状溶岩が高さ約 20m、長さ約 200m にわたり広がっており、宮崎県の天然記念物（名勝）に指定されている。美郷町西郷区の大斗の滝も緑と赤色をした玄武岩類の枕状溶岩にかかる滝である。また日南市と串間市の境界にある男鈴山にも同種の枕状溶岩が大規模に露出している（図 3）。これらの岩体は日向層群の剪断泥質岩優勢の付加体（神門ユニット）に属している。付加年代は約 4000 万年前の古第三紀始新世であり、海洋プレート上での枕状溶岩の噴出はさらに古い時代だと考えられる。

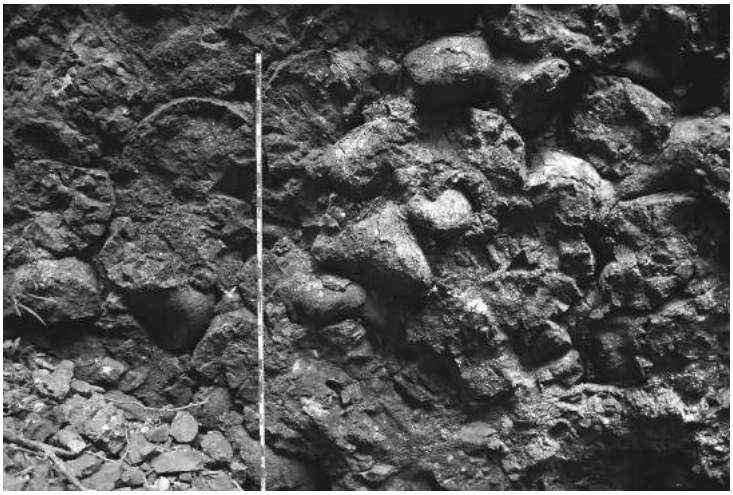


図3　男鈴山（日南市）の枕状溶岩

b．日本誕生の頃の古い火山の痕跡

日本海の拡大を経て日本列島の骨格が形成されたのが新生代新第三紀中新世中期の約 1500 万年前頃と考えられている。このころから第四紀のはじめ頃までの期間、九州各地では大規模な火山活動がおこっている。現在の宮崎県周辺に分布するこの時期の火山は大分県との県境に位置する祖母山と傾山、延岡市北西の大崩山とその周囲を取り巻く可愛岳　行縢山　比叡山　矢筈岳　丹助岳などの環状岩脈（リングダイク）、海岸部では都農町から日向市に尾鈴山、西米良村と熊本県の県境にある市房山などである。

この時期の火山で花崗岩で構成されている。

約 1000 万年前から約 150 万年前までのおよそ 750 万年にわたって宮崎層群が堆積した（図 1 ）。宮崎層群は日本列島弧の形成後に前弧海盆に堆積した地層である。首藤は 1950 年代に宮崎層群について詳細な研究（首藤 1952）を行い、岩相の側方変化により青島相，宮崎相，妻相の 3 相に識別した。その後も宮崎層群の層序関係については岩相分布や浮遊性有孔虫化石による層序対比、凝灰岩鍵層による K-Ar 年代など様々なアプローチにより複数の研究者が検討を繰り返している。層群オーダーでは南部地区を内海川層群として分離する案（鈴木 1987）や北部を日向灘層群として分離する案（Oda et al.2011) などが提案されたり、層名の区分についてもさまざまな提案（木野ほか 1984；氏家ほか 1993；中村ほか 1999; 鳥井ほか 2001）がなされており，宮崎層群の範囲を含む層名の統一はまだなされていない。第四紀に入ると、約 100 万年前～ 30 万年前に隆起をはじめた九州山地と鰐塚山地の間で凹地を形成した野尻、綾周辺や離水した宮崎層群にできた谷地形を埋めるように、諸県層群が堆積する。このあと寒冷期と温暖期を繰り返して段丘を形成した。

第四紀の火山活動では多数の火砕流堆積物や火山灰層などの痕跡が残っている。これらは各地で確認でき、景勝地や名勝となっている場所も多く、「ジオ」の視点で火山活動とその後の浸食などの時間の流れについてのストーリーが構成しやすい。宮崎県内では約 53 万年前に小林カルデラを噴出源とする小林火砕流、約 34 万年前に加久藤カルデラから加久藤火砕流が噴出している。阿蘇山は過去に 4 回大規模な噴火をしているが、その 4 回目にあたる約 9 万年前の阿蘇 4 火砕流は県北部の西臼杵地方から海岸部の延岡に達している。約 2 万 8000 年前には錦江湾の北に位置する姶良カルデラが入戸火砕流を噴出し県南から宮崎平野に達する地域が火砕流に覆い尽くされている。これら大規模火砕流は噴煙を高く上げ遠く遠隔地まで同時期に堆積する広域テフラとなっており、地質・考古分野などでは年代指標として活用されている。霧島火山群は加久藤カルデラの南縁で約 30 万年前頃から活動を開始し、複数の活動を繰り返して複雑な山容を持つ複合火山に成長した。現在でも新燃岳や硫黄山などは活発に活動しており注意深く観測されている。

宮崎の大地を「ジオ」の視点で分類

地質学的に自然環境を解説するときに、その形成史を解説するとストーリー性が出て理解しやすいと前項で述べた。ここでは県内の景勝地や名勝といわれる場所を地質学的なストーリーが提供できる場所という視点でいくつかのグループに分類してみる。

1）火山のつくりだす絶景

地質学的に興味深い解説がしやすく、ふしぎな絶景が広がる景勝地は全国的に見ても火山関連の地域が多い。特に九州はプレートの沈み込みに伴う火山フロントが南北に走る世界有数の巨大火山集中地帯である。日本のジオパーク 39 ヶ所（2015 年 9 月時点）のうち九州には 8 ヶ所あるがそのうち 7 ヶ所

い。宮崎県にはこのうち、主に古生代から中生代にかけて付加した黒瀬川帯、三宝山帯の２つの地質帯で構成される秩父帯が五ヶ瀬町、高千穂町、椎葉村、日之影町などの県北西部に分布する。秩父帯の南縁は仏像構造線と呼ばれる断層で南の四万十累層群に接している。中生代末から新生代に付加した四万十累層群は年代の古い順に諸塚層群、日向層群、日南層群・北川層群などで構成され（図１、２）、宮崎県の基盤の主体を構成する地層群である。

秩父帯や四万十累層群などの付加体の特徴として、大陸に付加した時期の地層に、それよりも古い時代などに海洋底で堆積しプレートの移動で運ばれてきた岩体がブロックで混在することがあげられる。たとえば、秩父帯南部の三宝山帯では約２億年前の三畳紀後半のサンゴ礁に生息した大型の貝化石メガロドンを含む石灰岩が約１億年前の白亜紀前期の泥岩にはさまれて分布している。また、四万十累層群では、大陸起源の砂質・泥質の地層に海底火山起源の玄武岩質火山岩類（緑色岩類）がはさまれて分布している。異なる時期や場所で堆積した岩石が混在する付加体形成のストーリーを知ると、地球規模の運動を感じることができる。マクロの視点＋時間軸の把握＝「ジオ」の視点というわけである。大陸東縁に集積した付加体が、約2000万年前に大陸から分離をはじめた。日本海の拡大と列島の形成については多くの研究があり、複数の考え方が示されているが、地下深部からのマントルプルームの上昇により日本海が拡大したとする説などが有力である。

その後、約1500万年前には日本列島の原形が誕生し、火山の活動の活発な時期がしばらく続いた（図１）。宮崎県内に分布するこの時期の火山としては、県北の祖母山・傾山・大崩山があげられる。このほか、現在の日向市沖に火口があったと考えられている尾鈴山も２回の火砕流を噴出して柱状節理の顕著な溶結凝灰岩を形成した。県西の市房山も

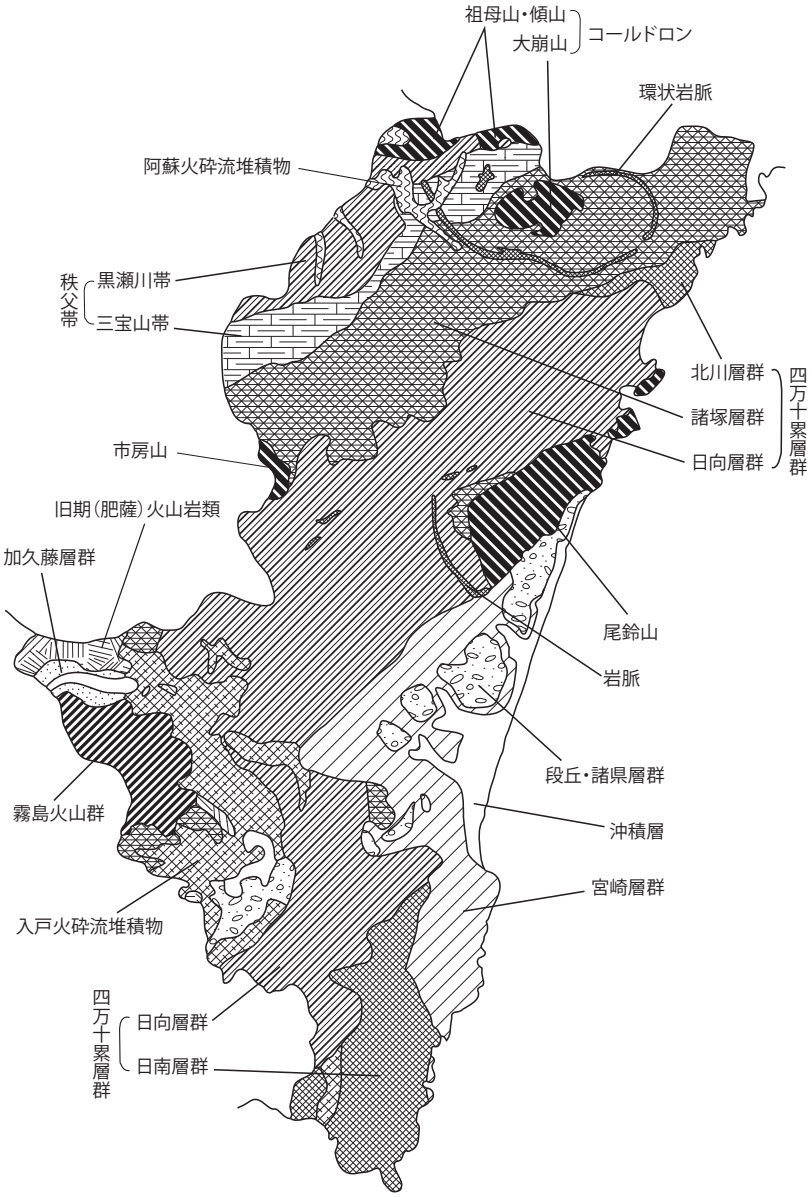


図2　宮崎県の地質概略図

みやざき地質ガイドブック（宮崎県総合博物館刊）を改変

の平野は、縄文時代の温暖期である約 7000 万年前の縄文海進期に水面下に没し波食された海食棚に海進に伴って砂礫が堆積している。その後の海退に伴って干潟や湿地となる時期には干潟の堆積物や泥炭（亜炭）層なども形成される。干潟の貝化石は延岡市の沖田川や宮崎平野の石崎川などで、泥炭は花ヶ島や跡江などで確認されている。

2）宮崎の地質

一般に観光地・景勝地の地質解説では「地域の地層は○○層で、○○などの岩石や化石が産出する。」といった用語だけを語るものが多い。ある地域の地質を語るとき、現在の状況が形成するまでの「地史」すなわち大地の歴史を語るとストーリー性があるため理解しやすくなる。

宮崎県の表層地質の概要

日本列島の位置するユーラシアプレート東縁部は、海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込む場所であり、沈み込む際に、海洋プレートの上の堆積物がはぎ取られ、陸側に付加する。これを付加体とよび、付加を繰り返すことで大陸側の縁に沿って海洋プレートを古い順にはぎ取って並べた縞状の地質帯が形成した。その後、約 2000 万年前から日本海の拡大が始まり、大陸から日本列島が分離してほぼ現在の位置に日本列島の原形ができあがるのが約 1500 万年前と考えられている。このため日本列島の基盤をつくる多くの部分が付加体で構成されている。大まかに言えば、西南日本の付加体は北ほど古く南ほど新しい地質帯と考えても良

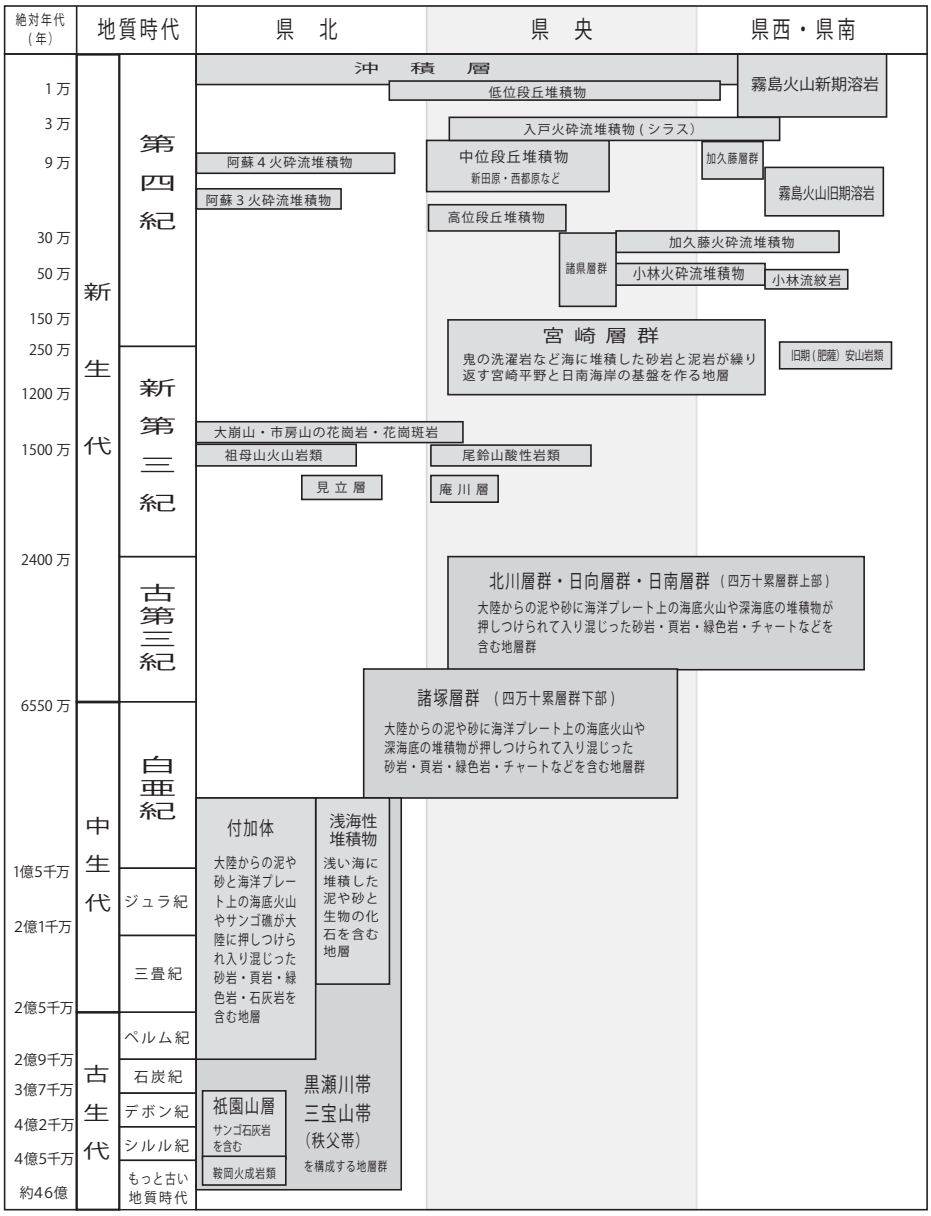


図1　宮崎県の地質早見表

みやざき地質ハンドブック（宮崎県総合博物館刊）を一部改変

なっている。九州山地は、臼杵八代構造線を北限として、宮崎平野北部・小林盆地北部を南限とする九州を北東から南西にたすきがけに分布する山地とされている。大分・宮崎の県境にそびえるの大崩山とその環状岩脈である可愛岳、行縢山、丹助岳、矢筈岳、比叡山、その西に位置する祖母山、傾山周辺の本谷山、笠松山など山群が九州山地の北部を構成する。ここから諸塚町の諸塚山、五ヶ瀬町の祇園山を経て、通称、九州脊梁山地と呼ばれる宮崎県西部を南北に連なる山群にいたる。脊梁山地の南には米良三山と呼ばれる市房山、石堂山、天包山がある。宮崎平野の北西には、尾鈴山、掃部岳、大森岳、七熊山があり九州山地の南限となっている。県西部には、霧島火山群がある。県南部には鰐塚山地があり、その西の日南海岸には鵜戸山群が連続している。

b．宮崎の河川と滝

宮崎県の河川の多くは九州山地を源流として太平洋に向かって流下する東向きの水系の本流と支流である。おもな水系は北から五ヶ瀬川、五十鈴川、耳川、名貫川、小丸川、一ツ瀬川、大淀川、広渡川などがある。河川に形成する滝は、その場所の地質に影響を受けることが多く。「ジオ」の視点での解説がしやすい場所である。県内には 140 を超える滝があるとされているが県北、県西部に集中する傾向がある。これは地質帯や火山の分布に関連が深い。日本の滝百選に選ばれた真名井の滝、行縢の滝、矢研の滝、関之尾滝の 4 瀑はそれぞれ、阿蘇カルデラ、行縢山（大崩山）、尾鈴山、姶良カルデラの火山活動と密接な関係がある。

c．宮崎の海岸

宮崎県の海岸線は日向灘に面して南北約 160km におよぶ。県北部の日豊海岸は四万十累層群（四万十超層群とも言う）で構成される岩礁のリアス地形、延岡市の東海半島から日向市の権現崎までは尾鈴山溶結凝灰岩による柱状節理の卓越した岩礁、日向以南の宮崎平野沿いは礫浜と砂浜の連続、青島から都井岬までの日南海岸は宮崎層群の砂岩泥岩互層と四万十累層群上部にあたる日南層群で構成される岩礁の海岸となる。日南海岸北部の宮崎層群は「青島の隆起海床と奇形波蝕痕」という名称で天然記念物に指定されており、その南には宮崎層群の厚い砂岩層が形成するケスタ地形が卓越する。串間市市木の南からは日南層群で構成される岩礁が続いており、2013 年には日南市猪崎鼻が「猪崎鼻の堆積構造」という名称で天然記念物に指定されている。

d．宮崎の平野と盆地

宮崎県の平野部は、おもに河口部に広がる沖積平野である。最も面積が大きいのは宮崎平野であり、大淀川、石崎川、一ツ瀬川、小丸川、名貫川などが海岸線に沿って砂州をのばしている。宮崎平野では内陸から過去の砂丘列が海岸線に平行に数列確認でき、砂丘列間は低湿地となっている。最も海側の砂丘列が大淀川から一ツ瀬川にいたる一ッ葉海岸である。延岡平野は五ヶ瀬川、祝子川、北川の河口部で長浜から方財島に至る砂丘列が形成されている。宮崎平野北西部には特徴的な段丘地形があり。大きく分類すると高位段丘、中位段丘、低位段丘といった標高の異なる平坦面が分布している。海岸部

はじめに

自然資源・自然環境という表現を使用するとき、一般には動植物と人間の生活する環境を指し、自然保護・環境保全という表現をするときも同様の対象の保護・保全を念頭に入れる場合が多いのではないだろうか。現状では、地質学的な自然資源や貴重な地質事象の保護・保全という観点は県民、行政ともに普段あまり意識されていないように思う。本稿では宮崎県の地質資源について注目し、宮崎の自然を地質学的な観点から紹介する。

「ジオ」の視点

「ジオ」という用語が近年使われ始めたが、まだまだ市民権を得ているとは言い難い。ジオ (geo) は ギリシア語で土地、地理、地球などを表す言葉で、ジオロジー（geology：地質学）の略称でもある。類似の用語に「エコ」がある。この用語は定着し、今さらエコの意味や概念を問う人は多くないだろう。エコロジーの本来の意味は「生態学」のことである。現在の使用法では「エコ」＝生態学ではない。元々は生態環境を考えようという運動から端を発しているが、現在では環境保全や保全に役立つ技術や生活習慣もしくは自然保護運動、自然回帰主義などまで、きわめて広範囲な活動全体が Ecology movement とよばれるようになり、その和製英語として「エコ」が使用されている。「ジオ」という言葉も、地質学の研究を普及伝達することにとどまらない可能性をもっている。地質学的な視点で自然や人間生活を眺めると、様々な分野を横断して地球を見る「ジオ」の視点が生じるのである。たとえば、なぜそのような地形や植生となったのか、なぜそこで鉱業資源が産出するのか、火山活動と人間生活の関わり、恐竜やナウマンゾウなどの生物進化の謎、いつ頃どのようなイベントがあってこの風景が形成したのかなど、「動物」「植物」にとどまらず寒冷化や温暖化などの「気候」も地質学と密接であり、日本海の拡大や列島形成などの広域的な地史だけでなく、滝や海岸の形成史などの地元の「歴史」も「ジオ」の視点で言及できる。さらに、旧石器時代から始まる石材の利用や鉱物資源、農業など人間と大地の関わりなども「ジオ」の視点の守備範囲ではないだろうか。「エコ」と同様に「ジオ」の視点は単なる地質学の解説を越えた自然資源活用の視点と考えたい。

宮崎の大地の成り立ち

1）宮崎の地形

a．宮崎の山岳

「ジオ」の視点の一つにマクロの視点は欠かせない。巨大な山地などを巨視的に眺めて構造の特徴を捉えると、また新しい形成のストーリーが見えてくる。宮崎の北部から西部にかけては九州山地が連

目　次

はじめに

Ⅰ　「ジオ」の視点

Ⅱ　宮崎の大地の成り立ち
　1）宮崎の地形
　2）宮崎の地質

Ⅲ　宮崎の大地を「ジオ」の視点で分類
　1）火山のつくりだす絶景
　　a．日本列島誕生以前の火山の痕跡
　　b．日本誕生の頃の古い火山の痕跡
　　c．巨大火砕流がつくった絶景
　　d．活動する火山・霧島の景色
　2）堆積岩の風化浸食がつくる悠久のアート
　　a．気候と地殻変動の絶妙なバランス
　　b．水流と堆積岩がつくる絶景
　　c．岩石の差別浸食がつくりだすオブジェ
　　d．塩類風化（タフォニ地形）
　3）地球からの贈り物　人と大地の関わり
　　旧石器から現在までの岩石の利用
　4）太古の生命が語る宮崎の歴史
　　a．古生代の化石
　　b．三畳紀～ジュラ紀の化石
　　c．白亜紀の化石
　　d．古第三紀の化石
　　e．新第三紀の化石
　　f．第四紀の化石

おわりに

みやざき地質ガイド

―郷土宮崎を知るツールとしての地質学―

宮崎地質研究会

赤　崎　広　志

宮崎県文化講座研究紀要　第四十二輯

平成二十八年三月三十一日　発行

編集
刊行　宮崎県立図書館
〒八八〇―〇〇三二
宮崎市船塚三丁目二一〇番地一
TEL〇九八五―二九―二九一一

印刷　㈱ヒダカ印刷
〒八八〇―〇八六二
宮崎市潮見町一三番地五
TEL〇九八五―二八―四一一三

No.

（非売品）

©2016　宮崎県立図書館